

Ezobara Site

江曾原遺跡

— 八幡地区農道整備事業に伴う発掘調査報告書 —

二〇一六年三月

山梨県東農務事務所・山梨市・公益財団法人山梨文化財研究所

2016年3月

山梨県東農務事務所
山梨市
公益財団法人山梨文化財研究所

山梨市文化財調査報告書 第25集

Ezobara Site

江曾原遺跡

—八幡地区農道整備事業に伴う発掘調査報告書—

2016年3月

山梨県峡東農務事務所
山梨市
公益財団法人山梨文化財研究所

例　　言

- 1 本書は平成24・25年度に発掘調査を行い、平成27年度に整理作業を実施した山梨県山梨市江曽原、大工に所在する江曽原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は農村地域活性化農道整備事業に伴うもので、事業主体は山梨県である。試掘調査を山梨市教育委員会が実施し、本調査は山梨県岐東農務事務所より委託を受けて公益財団法人山梨文化財研究所が実施した。
- 3 本書の原稿執筆、編集は柳原功一（公益財団法人山梨文化財研究所 考古第2研究室）が行った。
- 4 発掘調査における基準点測量、ポール写真撮影、全体図作成業務は株式会社テクノプランニングが実施した。
- 5 本書に関わる出土品、記録類は山梨市教育委員会で保管する予定である。
- 6 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸機関、諸氏からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称略）。

山梨県岐東農務事務所、山梨市教育委員会、山梨県立考古博物館、原田隆・三井茂郎・小林哲也（山梨県岐東農務事務所）、三沢達也・雨宮聰弘（山梨市教育委員会）、保坂康夫・小林健一（山梨県立考古博物館）、三枝哲雄（三枝興業）、森谷忠・柴田直樹（株式会社テクノプランニング）、森原明廣・平野修・望月秀和・宮澤公雄・中山千恵・河西学（公益財団法人山梨文化財研究所）

凡　　例

- 1 遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系（原点：北緯36度00分00秒）、東経（138度30分00秒）に基づく座標数値である（世界測地系数値）。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北で、真北の方向角は0° 6' 6"である。
- 2 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

堅穴	1 : 60
竈・土坑・ピット	1 : 30
全体図	任意
土師器・須恵器・灰釉陶器	1 : 3
土製品	1 : 2
- 3 土器断面図中の黒塗りは須恵器、ドット網掛けは陶磁器、網掛けは器面の黒色処理を表す。
- 4 平面図における焼土範囲は破線で表す。断面図の破線は掘り方を示す。平面図における遺物の種別は下記のとおりである。
- 5 土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。
- 6 平面図における遺物番号は、遺物図版、遺物観察表と一致する。
- 7 本書の図1は国土地理院発行1/200,000地勢図甲府、図2は1/25,000地形図塙山・川浦、図3は山梨市都市計画基本図1/2,500を使用した。

遺物分布 マーク	
・	土師器・須恵器・陶器・磁器
○	土製品・瓦質土器
×	炭化物
*	粘土
遺物図版 スクリーントーン	
[■]	焼土・炭化物範囲
遺物図版 スクリーントーン	
[■]	須恵器
[□]	内黒

本文目次

例言		第3節 研究史	3
凡例		第3章 調査の方法と成果	10
第1章 経過	1	第1節 調査の方法	10
第1節 調査の経過	1	第2節 層序	10
第2節 第1次調査の発掘作業経過	1	第3節 遺構	10
第3節 第2次調査の発掘作業経過	1	第4節 遺物	16
第4節 整理等作業の経過	2	第4章 総括	22
第2章 遺跡の位置と環境	2	報告書抄録	
第1節 地理的環境	2	奥付	
第2節 歴史的環境	2		

挿図目次

図1 遺跡の位置	3	図6 旧1号堅穴住居址（4号堅穴）	11
図2 周辺遺跡の分布	4	図7 井戸実測図	13
図3 調査地点の位置	6	図8 大溝内粘土管の様子	14
図4 江曾原遺跡旧調査地点	7	図9 粘土管の概略図	15
図5 旧平面図との重ね合せ	8		

表目次

表1 周辺遺跡一覧	5	表6 金属製品観察表	21
表2 土坑・ピット一覧表	17	表7 野沢コレクション 土器・陶磁器観察表	21
表3 土器・陶磁器観察表	19	表8 野沢コレクション 石器観察表	22
表4 石製品観察表	21	表9 野沢コレクション 土製品観察表	22
表5 土製品観察表	21		

図版目次

第1図 調査区全体図	25・26	第13図 1・2号土坑、121・141・156号ピット	
第2図 1～3号堅穴、31号ピット、3号溝	27		38
第3図 1～3号堅穴	28	第14図 B区東壁、125・168・178号ピット、4号溝	
第4図 1～3号堅穴掘り方、竈	29		39
第5図 4号堅穴、2号掘立、3号土坑、145号ピット、 11号溝	30	第15図 出土遺物（1）	40
第6図 5・7号堅穴、3号掘立	31	第16図 出土遺物（2）	41
第7図 7号堅穴竈、6号堅穴	32	第17図 出土遺物（3）	42
第8図 8号堅穴、1・2・5号溝	33	第18図 出土遺物（4）	43
第9図 1・2・5号溝	34	第19図 出土遺物（5）	44
第10図 1号掘立、17号溝	35	第20図 昭和25・26年出土遺物（1）	45
第11図 1号井戸、5～15号溝	36	第21図 昭和25・26年出土遺物（2）	46
第12図 5～20号溝	37	第22図 昭和25・26年出土遺物（3）	47
		第23図 B・C区全体図	48

写真図版目次

図版 1	1 第1・2次調査全景合成写真（上から）	44 5号溝（大溝）完掘状況
	2 第1次調査俯瞰写真	45 4号竪穴内暗渠検出状況
	3 第1次調査区俯瞰写真	46 4号竪穴完掘状況
	4 第1次調査区俯瞰写真	47 4号竪穴・2号掘立完掘状況
	5 第1次調査区俯瞰合成写真（上から）	48 1号掘立完掘状況
図版 2	6 第2次調査区合成立俯瞰写真（上から）	49 1号掘立完掘状況
	7 第2次調査区俯瞰写真	図版 9 50 1号掘立・17号溝完掘状況
	8 第2次調査区俯瞰写真	51 1号掘立付近調査風景
	9 第2次調査区部分俯瞰写真	52 8号竪穴遺物出土状況
	10 第2次調査区俯瞰写真	53 8号竪穴遺物出土状況
図版 3	11 第1次 A区調査前の状況	54 8号竪穴遺物出土状況
	12 第1次 B区調査前の状況	図版10 55 8号竪穴完掘状況
	13 第2次調査 C区調査前の状況	56 2号土坑周辺
	14 2号溝上層遺物出土状況	57 5・7号竪穴完掘状況
	15 1号溝遺物出土状況	58 5・7号竪穴完掘状況
	16 A区1号溝ほか	59 第2次調査区調査風景
	17 1号溝上層の礫を除去した状況	60 6号溝完掘状況
	18 1号溝上層の礫を除去した状況	61 6号竪穴遺物出土状況
図版 4	19 2号溝上層の礫を除去した状況	62 6号竪穴完掘状況
	20 A区作業風景	図版11 63 6号竪穴遺物出土状況
	21 A区完掘状況	64 6号竪穴内完掘状況
	22 1～3号竪穴遺物出土状況	65 6号竪穴内遺物出土状況
	23 1号竪穴付近遺物出土状況	66 6号竪穴内遺物出土状況
	24 3号竪穴遺物出土状況	67 18～20号溝付近完掘状況
	25 1～3号竪穴・溝等完掘状況	68 141号ピット遺物出土状況
	26 1～3号竪穴完掘状況	69 1号土坑完掘状況
図版 5	27 1号竪穴完掘状況	70 20号溝遺物出土状況
	28 柱穴列完掘状況	図版12 71 76号ピット
図版 6	29 1～3号竪穴完掘状況	72 78号ピット
	30 1～3号竪穴掘り方完掘状況	73 79号ピット
	31 1～3号竪穴掘り方完掘状況	74 80号ピット
	32 2号竪穴竈	75 83号ピット
	33 2号竪穴竈	76 84号ピット
図版 7	34 1号井戸周辺調査風景	77 87号ピット
	35 4号竪穴付近調査風景	78 88号ピット
	36 1号井戸完掘状況	79 89号ピット
	37 1号井戸内縫検出状況	80 90号ピット
	38 1号井戸内壁の状況	81 114号ピット
	39 1号井戸と周辺の溝完掘状況	82 121号ピット
	40 1号井戸周辺溝完掘状況	83 124・125号ピット
	41 5号溝（大溝）付近完掘状況	84 138号ピット
図版 8	42 5号溝（大溝）断面	85 145号ピット
	43 5号溝に残る杭	86 154号ピット

- 87 164号ピット
88 188号ピット
- 図版13 89 B区調査風景
90 A区調査風景
91 見学会風景
92 見学会風景
93 見学会時に公開された植物遺存体資料
94 見学会時に公開された炭化物・歯等
95 資料室展示の江曾原遺跡出土資料
96 江曾原遺跡の現況写真（資料室展示）
- 図版14 出土遺物
図版15 出土遺物
図版16 出土遺物
図版17 出土遺物
図版18 野沢氏調査写真
1 井戸周辺
2 井戸上層
3 井戸内木製品出土状況
- 4 溝内粘土管
5 大溝内粘土管断面
6 溝内粘土管
7 大溝内粘土管
8 2号倉庫
9 柱穴内木材出土状況
- 図版19 野沢氏調査写真・記録類
10 旧3号竪穴内疊出土状況(置き石屋根か)
11 出土した遺物
12 野帳『江曾原遺跡発掘日誌2』
13 野帳の内容
14 江曾原遺跡報告原稿
15 調査初日の遺構確認状況(藁で遺構を表示)
16 女子生徒による発掘調査
17 井戸付近の調査風景
18 女子生徒による発掘調査

第1章 経過

第1節 調査の経過

平成24年、山梨市江曾原地内において山梨県による農村地域活性化農道整備事業計画に伴い、江曾原遺跡内を通過する農道新設の計画が提示された。江曾原遺跡は昭和25・26年、日下部遺跡に統合して調査が行われ、平安時代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡などのセットをもつ集落であるとともに、当時の動植物遺存体の存在が明らかにされた遺跡として学史的に著名である。

事業計画に基づき山梨市教育委員会では予定地内で試掘調査を実施したところ、平安時代の土師器等が出土地したため、開発行為に先立ち埋蔵文化財に関する本調査が必要と判断した。事業主体者の山梨県・岐東農務事務所では本調査の委託先として公益財団法人山梨文化財研究所を選定し、委託者 山梨県・岐東農務事務所、受託者 公益財団法人山梨文化財研究所として平成25年2月12日、埋蔵文化財発掘調査業務委託に関する契約を締結した。当初の契約期間は契約日翌日から平成25年3月28日までであったが、発掘届提出後、1か月後に実際の調査開始となるため、当初の契約終了日では十分な調査期間を確保できないという理由で、協議を経て工期を4月30日に延期した。調査にあたっては岐東農務事務所、公益財団法人山梨文化財研究所、山梨市教育委員会の三者で「農村地域活性化農道整備事業八幡地区内の埋蔵文化財に関する協定書」を締結し、山梨市教育委員会の指導監督のもと、発掘調査を実施することとなった（第1次調査）。

第2次調査は委託者 岐東農務事務所、受託者 公益財団法人山梨文化財研究所の間で委託契約を締結し、平成25年11月22日（契約日）から平成26年2月28日を契約期間として本調査が実施された。

第2節 第1次調査の発掘作業経過

調査区は水路を挟んで南北2地区に分かれるため、北側をA区、南側をB区と仮称した。平成25年(2013)3月19日、A区より重機による表土剥ぎを開始し、同時に遺構確認作業に入った。重機による排土は調査区外に置くスペースがないため、調査区内に仮置きし、反転することにした。3月21日にはA区の調査を終え、B区の調査を行い、4月2日には調査を終了し、再び重機を入れて表土剥ぎを行った。4月4日には調査を終了し、埋戻しを行った。

【第1次調査日誌抄録】

- 2013年3月19日(火) 器材搬入。プレハブ、仮設トイレ設置。重機による表土剥ぎ実施。確認面精査、溝の掘り下げ。基準点設置。
3月21日(木) A区精査開始。B区溝、ピット掘り下げ。
3月22日(金) B区完掘。写真撮影。A区確認面精査。1・2号堅穴設定、調査開始。
3月25日(月) A区ピット完掘、4号溝完掘。
3月26日(火) A区1・2号堅穴調査。遺物取り上げ。B区の溝覆土中の礫群のポール撮影。市教委来跡。
3月27日(水) 調査実施。
3月28日(木) 調査実施。
3月29日(金) 調査実施。
4月1日(月) 1・2号堅穴の床下調査。完掘写真。市教委来跡。
4月2日(火) 重機による埋戻し、反転して掘り下げを行う。調査区を一部拡張。
4月3日(水) 調査実施。
4月4日(木) 1号溝の続きの掘り下げ。一部重機による埋戻し開始。
4月5日(金) 重機による埋戻し。器材片付け。

第3節 第2次調査の発掘作業経過

第2次調査区は第1次調査区の延長線上にあり、1次調査区とは道をはさんだ南側にあたる。昭和25・26年に野沢昌康氏が調査した地区と重複し、かつて一度調査された地点ではあるが、当時の記録が必ずしも十分ではないため、野沢氏調査地点を含めて再調査することとなった。岐東農務事務所と公益財団法人山梨文化財研究所の契約の後、発掘届を提出、約1か月後の12月23日に現場作業に着手した。

調査区内での排土仮置きののち、排土を反転してその下を調査した。2014年1月26日に地元の方々に現場説明会を行い、1月30日には調査を終了した。

【第2次調査日誌抄録】

- 2013年12月23日(月) 重機による表土剥ぎ実施。
2014年1月6日(月) 本日より作業開始。確認面の精査。ピットなど掘り下げ。仮設トイレ設置。
1月7日(火) 井戸・溝など掘り下げ。旧1号住確認、掘り下げ。基準点設置。
1月9日(木) 確認面精査。旧1号住の再発掘。柱穴

- 列の掘り下げ。暗渠検出。本日まで旧調査区をほぼ調査完了。
- 1月10日(金) 確認面精査。ピット・溝など調査。ボーラー撮影実施。
- 1月16日(木) 調査実施。
- 1月17日(金) 調査実施。
- 1月20日(月) 調査実施。
- 1月21日(火) 調査実施。
- 1月22日(水) 調査実施。
- 1月23日(木) 調査実施。
- 1月25日(土) 全体写真撮影、エレベーション図作成。
- 1月26日(日) 遺跡見学会を午前10時より実施。約80名参加。シート、土壌の片付け。
- 1月27日(月) 仮設トイレ返却。
- 1月29日(水) ブルーシートの洗浄等。
- 1月30日(木) 器材の片付け、遺物洗浄等。

第4節 整理等作業の経過

整理作業は平成27年度、山梨県嶺東農務事務所が委託し、公益財團法人山梨文化財研究所が受託して行われることとなった。平成28年、2月15日に契約、契約日から平成28年3月28日までの間を委託期間として公益財團法人山梨文化財研究所内で実施した。

整理作業の中で、現在山梨県立考古博物館が管理する野沢昌康氏の江曾原遺跡関連資料（野沢コレクション）を調査する機会を得、当時の野帳2冊、記録写真

およびネガ、調査原図、トレース図、メモ類および報告書の手書き原稿、出土遺物の大多数の存在を確認した。野沢昌康氏（1912－2011）は昭和25・26年に江曾原遺跡を調査した山梨県考古学界の草分け的な研究者であるが、100歳で逝去した。その後、遺族が資料を一括して山梨県立考古博物館へ寄贈し、それらの一部資料については『山梨県考古学協会誌』21号に「野沢昌康先生追悼号」として遺物の国化、報告が行われている（平野2012）。また江曾原遺跡出土資料については、一部の土師器坏皿類および甕等が山梨市立八幡小学校資料館で展示されているほか、調査担当者であった野沢氏が記録類とともに自宅で保管してきたようである。土師器類には残念ながら出土遺構に関する情報は注記されていないものの、いくつかの大型破片には「エゾ原」と墨書きがされている。

今回の報告では65年前に野沢氏が調査を行った場所を再発掘することになったため、野帳、写真の一部を借用し、必要な箇所を本報告の中に掲載するとともに、個々の遺構についての調査時の所見、遺構写真などを示しておく。

【整理作業参加者】

池田美樹・岩崎満佐子・川口三和・岸本美苗・柳原ゆかり・齐藤ひろみ・佐野真雪・須田泰美・武井美知子・田中真紀美・中川美千子・藤原五月・古郡明・横田杏子・大塚邦明・中島一成、中山響

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

江曾原遺跡が所在する山梨市八幡地区は、山梨県甲府盆地の北東縁にあたり、兄川と弟川が形成した東向き、約22°南偏した方向に形成された扇状地上にある。兄川、弟川は笛吹川の支流で、兄川は奥秩父山地の支尾根のひとつ、帶那山山頂付近に源流をもつ河川で、八幡扇状地の南縁を兄川、北縁を弟川が流下する。この2本の河川に縁取られた八幡扇状地は、扇頂部を山梨市水口地区、扇端部を笛吹川とし、笛吹川右岸に形成された東西約3km、南北約1.5mの範囲の小扇状地である。遺跡は扇状地の南西側、兄川寄りの台地縁辺にあり、南側は兄川を見下ろす断崖地形となっている。一段低い川沿いには、切妻民家群で知られる江曾原集落があり、遺跡は集落背後の西側にあたる。八幡地区には八幡条里とよばれる条里地割が発達し、かつては水田城として、また近年ではモモ・ブドウなどの果樹

地帯としての土地利用が行われてきた。兄川上流の山梨市水口、山口地区からは、林道を経由して太良峠を経て、甲府市上積翠寺町、要害山方面に下ることができる。また近年では南側の丘陵上に笛吹川フルーツ公園が建設され、県民の憩いの場となっているほか、西関東連絡道路の一部開通、ジャンクションの開設により、甲府市横根方面とのアクセスが格段に改善された。

第2節 歴史的環境

八幡地区には、古くは江曾原遺跡の近くに所在する兄川河床で昭和36年にナウマンゾウの化石が野沢昌康氏によって発見され、近年再調査が行われている。また八幡地区的入口にあたる笛吹川寄りの国道近くには甲斐国守護武田家の崇敬を集めた窟八幡神社が扇端部中央に鎮座する。貞觀元年（859）、豈後宇佐八幡宮から勧請したといわれ、当初は川中島の大井保に祀られ

たものその後に移転したといわれるが、扇状地の湧水地点に対する祭祀から発展したとみられる。現在、本殿、拝殿をはじめとして9棟11件の国指定重要文化財をもち、そのほか4件の県指定文化財をもつ名利で、鐘楼の存在が示すように寺院を併せ持つ神仏習合寺院であった。本殿は応永17年（1410）武田信満建立といわれるが、現在の本殿は1522年に武田信虎が建立した。扇頂部の天神社にはやはり同時期の本殿があり、両者を直線で結ぶようにして八幡条里が施行されている。このやや南に傾いた東西ラインは扇状地の軸線方向にほぼ一致し、条里地割の南北軸は東に 24° 傾いているが、甲府盆地東部の重川右岸に分布する 12° 傾く岐東条里と区別されている。八幡条里の成立時期は、寛八幡神社、天神社の成立時期から16世紀初頭以前といわれ、中世莊園的な条里プランと考えられている。

八幡地区には寛八幡神社のほか、神社周辺には神宮寺等の寺院があり、寛八幡神社に関連した坊院群の跡がある。また北側には古刹清水寺があり、平安時代の千手觀音等を保有している。

遺跡分布は図2のように扇頂部、扇状地の台地縁辺にあたる北南縁に点在し、绳文時代中期、平安時代のほか、古墳時代等の遺跡分布がみられる。八幡小学校の資料室には、植田遺跡などの绳文土器などの考古資料が展示されている。なお、江曾原遺跡には绳文時代、

古墳時代前期の遺物が散布するとして、山梨県遺跡地名表には繩文、古墳の遺跡として登録されている。

八幡地区では西関東連絡道路建設に伴い、これまでに数地点で遺跡調査が行われている。寛八幡神社に近い扇状地扇端部を横断する道路であるが、上コブケ遺跡では繩文中期後半、奈良～平安末の集落跡が検出され、多数の掘立柱建物跡が見つかっている。この八幡条里が広がる地域は古代、甲斐国山梨郡可美郷に相当するとみられ、正倉院伝世の白施に「甲斐國山梨郡可美里日下」（天平宝字6年、714年）銘が墨書きされた資料や、平城宮出土木簡の「山梨郡加美郷大部宇万呂六百文」などの著名な文字資料があり、山梨市域を中心とした可美郷の比定地とされている。

第3節 研究史

江曾原遺跡は、昭和25年から26年1月にかけて、当時山梨大学加納岩分校教員であった野沢昌康氏により初めて発掘調査が行われた学史的な遺跡である。山梨県内では韮崎市の坂井遺跡、山梨市の日下部遺跡に次ぐ初期の発掘調査例となり、昭和27年に報告された成果は、古代農村集落の一端を明らかにしたものとして県内外より注目を受けることとなった。

昭和25年の発掘の発端となったのは、水田の地盤改良工事であった。報告によれば寛田常春氏の所有する

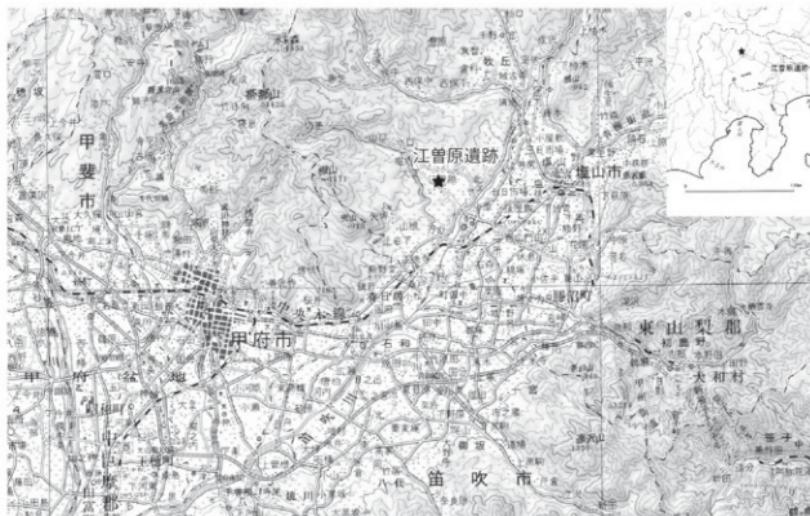


図1 遺跡の位置

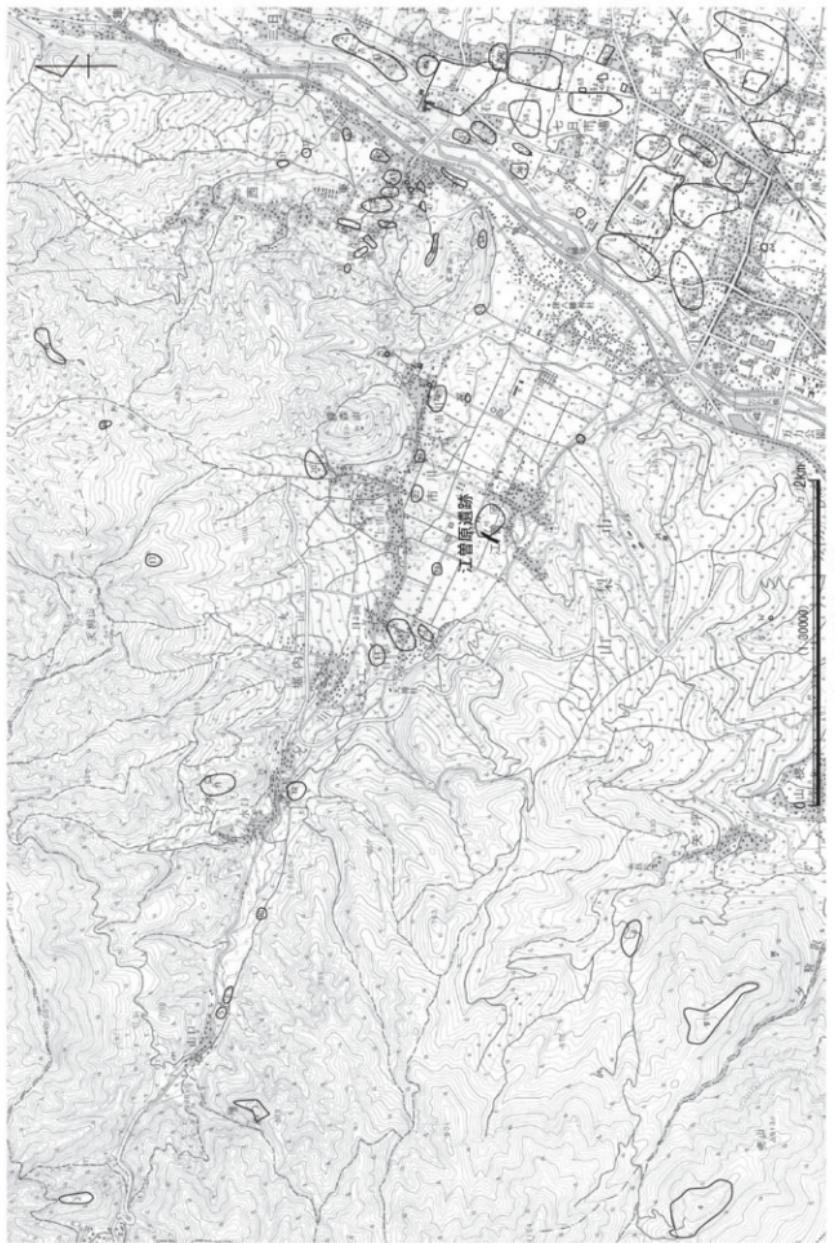


図2 周辺古墳の分布

表 1 周辺道路一覧

No.	道路名	種別	開通年	時代	所在地	No.	道路名	種別	時代	所在地
1	日笠原道跡	集落路	國文／古墳	山梨市日曾原字子面	40	久保音跡	散布地	平安	山梨市東字入保	
2	切妻の城山道路	城館跡	山梨市切妻字八幡山	41	上野氏居敷	城跡	近世	山梨市東字入保		
3	弘前城	城館跡	山梨市八幡山	42	久保田道跡	散布地	國文	山梨市東字入保田		
4	鶴狩山古道	城館跡	春日原町下岩下	43	原敷森A道跡	散布地	國文	山梨市東字入保		
5	影差塗跡	散歩地	山梨市水口字影差	44	村西道跡	散布地	國文	山梨市東字入保		
6	和田塗跡	散歩地	山梨市水口字和田	45	久保西道跡	散布地	國文	山梨市東字入保		
7	遠方原敷	城館跡	山梨市三ヶ所遠方	46	久保道跡	散布地	國文	山梨市東字入保		
8	木戸川山道跡	散歩地	山梨市久呼	47	丸山道跡	散布地	國文	山梨市東字入保		
9	御前山の神台	城館跡	山梨市中世	48	社寺跡	社寺地	中世／近世	山梨市東字入保田		
10	御前堂跡	散歩地	山梨市神守字源田屋	49	乙川下原道跡	散布地	國文	山梨市二日橋字聖敷		
11	堂平塗跡	散歩地	山梨市水口字堂平	50	河原道跡	散布地	國文	山梨市上日坂字河原		
12	鷹塗跡	散歩地	山梨市水口字鷹平	51	下原道跡	散布地	國文	山梨市上日坂字多勃		
13	丸山の舞台	城館跡	山梨市北字大平山	52	宮ノ前(七日子)道跡	散歩地	國文／占堀／余良	山梨市七日坂字宮ノ前		
14	小塙塗跡	散歩地	山梨市施字小塙	53	西山道跡	散布地	國文	山梨市北字西山		
15	大工塗跡	散歩地	山梨市大工字日影	54	下山西道跡	散布地	國文	山梨市東字中下		
16	大工街道跡	散歩地	山梨市大工字井ノ久保前	55	天神原北道跡	散布地	國文	山梨市上日坂字天神原		
17	長原寺古道	古道	山梨市上方字瓢尻	56	天神原南道跡	散布地	國文	山梨市七日坂字天神原		
18	西山城跡	城館跡	山梨市北字西山西	57	西ノ原道跡	散布地	國文	山梨市北字西山西		
19	野宵坂西城跡	城館跡	山梨市中世大平山	58	中只道跡	散布地	國文	山梨市七日坂字中只		
20	川本北塗跡	散歩地	山梨市川字平山	59	梅ノ木道跡	散布地	國文	山梨市七日坂字中只		
21	芦原道跡	散歩地	山梨市大工字芦原	60	王平道跡	散布地	國文	山梨市七日坂字王平		
22	川本西塗跡	散歩地	山梨市川字柄田	61	現住深見道跡	散布地	國文	山梨市七日坂字現住		
23	柄田塗跡	散歩地	山梨市川字柄田	62	押見道跡	散布地	國文	山梨市七日坂字押見		
24	富士塗	富士塗	山梨市上方字巣尾	63	卯見坂北道跡	散布地	國文	山梨市下井川卯見坂		
25	北本北塗跡	散歩地	山梨市中世大平山	64	卯見坂南道跡	散布地	國文	山梨市下井川卯見坂		
26	北本南塗跡	散歩地	山梨市川字於北	65	前田道跡	散布地	國文	山梨市小原字前田		
27	神明前道跡	散歩地	山梨市川字神明前	66	裏見道跡	散布地	國文	山梨市小原字裏見		
28	市川東塗跡	散歩地	山梨市川字神明前	67	立石道跡	散歩地	國文／余良／平安	山梨市小原字立石		
29	大坂塗跡	散歩地	山梨市川字大坂	68	下郡道跡	散歩地	國文／余良／平安	山梨市小原字下郡		
30	日笠原前道物包盛地	その他	山梨市南字上兒川(河内)	69	下原道跡	散布地	國文	山梨市小原字下原		
31	菅畠道跡	散歩地	山梨市川字菅畠	70	八王子道跡	散布地	國文	山梨市小原字八王子		
32	菅畠道跡	散歩地	山梨市東字堂敷	71	太輔道跡	散布地	國文	山梨市小原字太輔		
33	切通北塗跡	散歩地	山梨市東字切通	72	西保道跡	散布地	國文	山梨市小原字西保		
34	切通西塗跡	散歩地	山梨市東字切通	73	安田道跡	城跡	中世	山梨市小原字安田		
35	切通東塗跡	散歩地	山梨市東字切通	74	寺の下道跡	散布地	國文	山梨市小原字寺の下		
36	幕下塗跡	散歩地	山梨市東字幕下	75	樋口道跡	散布地	國文	山梨市小原字樋口		
37	添田塗跡	散歩地	山梨市東字添田	76	三カ所道跡	散布地	國文	山梨市小原字三ヶ所		
38	切通南塗跡	散歩地	山梨市東字藤の木通下					山梨市小原字中世		
39	藤の木通下塗跡	散歩地	山梨市東字藤の木通下					山梨市三ヶ所寺		

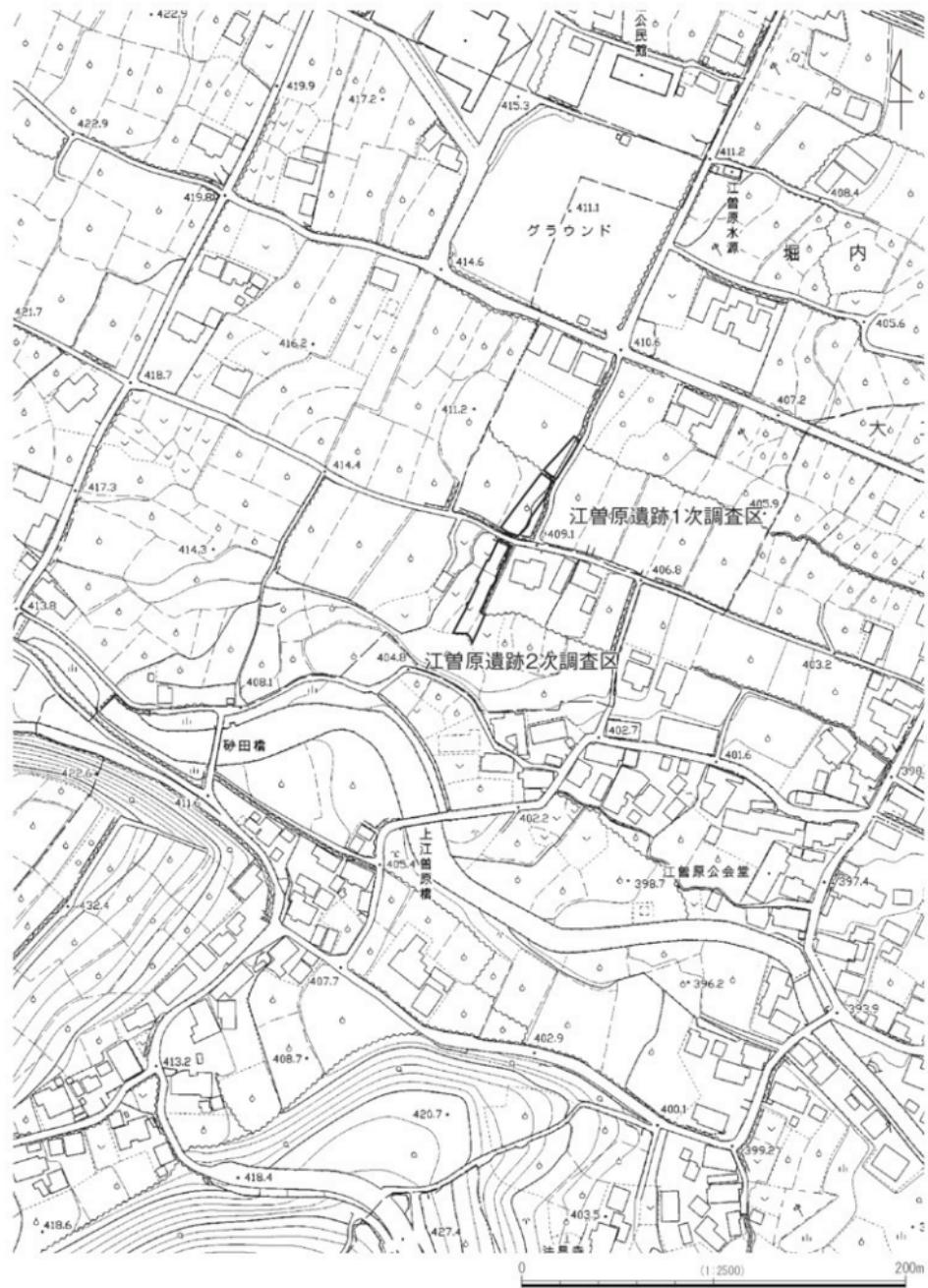


図3 調査地点の位置

水田が「水もちが悪いというので二十梶余の地下げ工事を行ったのが遺跡発見の端緒」であったという。昭和25年1月の終わりから3月中旬にかけて、当時山梨大学に在職していた野沢氏を中心に山梨大学加納岩分校の学生が主力となり、地元の小学校教官久保川勝男氏、中学校教官小林桂氏、中学生、地主の窪田氏等、のべ約300人が参加して約3畝を調査した。堅穴住居や倉庫跡などの発見は多くの人々の関心を集めため、2次調査が昭和25年12月下旬から昭和26年1月下旬にかけて行われ、計約5畝が調査された。

1・2次の調査では、堅穴住居跡3軒（報告では第1～3号堅穴住居跡）、掘立柱建物跡3棟（報告では1～3号倉庫址）、井戸1、泉2、溝（報告では大溝、水道施設、排水溝等）が検出された。とくに大溝からは井戸からの水を導く導水管として設置されたと考えられる「粘土管」が見つかったほか、イネ・コムギ・モモ・アンズ・ウメ・カキ・ヒヨウタン・ヒメグルミ等の種実が出土し、食物史、農業発展史を考えるうえで貴重なデータを提示した。また1号堅穴には床全面

から炭化したススキが出土し、敷物にしたと推定されている。また動物化石として大溝から蒙古野馬（ウマ）の歯、2号堅穴付近からヤギの乳臼歯らしきものが出土し、ヤギであれば全国初の発見であると報告されるなど、家畜史研究においても大きな課題を投げかけることとなった。

昭和25・26年の調査経緯については、野沢コレクション資料の野帳に詳細な記録がある（『八幡村八反田遺跡』『江曾原遺跡発掘日誌2』）。それらによると、昭和25年1月24日、小学校教官の久保川氏より野沢氏に遺跡発見の連絡があり、翌25日（水）9時過ぎに現場に駆け付けたところ、水田の所有者、窪田氏（昌次氏の実家）が田の水もちを良くするため土地を3・40cm掘下げ作業中、甕を発見したということで、既に八幡中学生が土器を乱掘していたため、甕付近の形が崩れていたという。この日、第1次調査に着手した。以下、野帳の調査日誌からの抜粋である。

1月29日（日） 1号堅穴住居跡の輪郭確認。

1月30日（月） 作業実施。

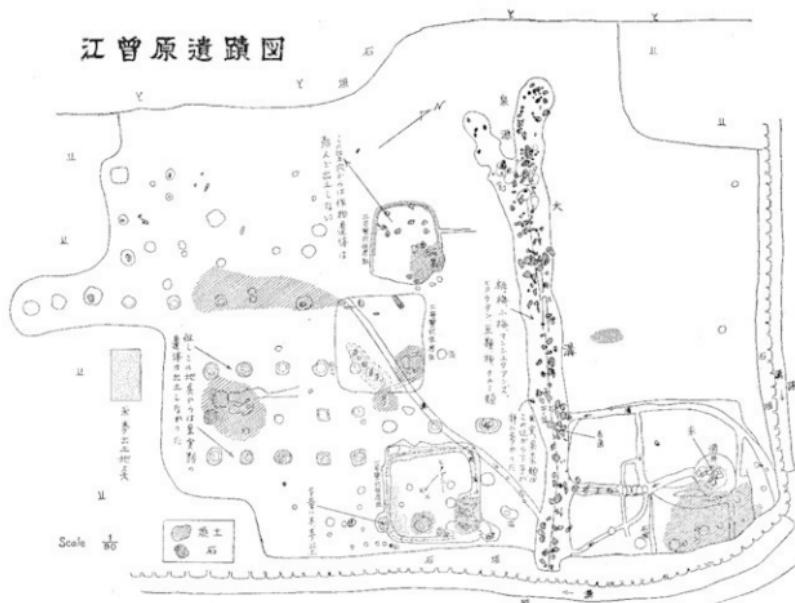


図4 江曾原遺跡旧調査地点（直良 1956）



図5 1日平面図との重ね合せ（野沢1952を改変）

- 1月31日(火) 前日夜の豪雨で排水のみ行う。
- 2月1日(水) 柱穴確認。溝から植物遺体検出。
- 2月2日(木) 見学者多数あり。溝内からモノ核多数検出。2号堅穴住居跡確認。
- 2月3日(金) 1号堅穴の床面精査。柱穴確認。そのそばから甕検出。溝中の構造確認。見学者多数。
- 2月4日(土) 溝、1号堅穴調査。写真撮影。
- 2月5日(日) 井戸完掘後、測量。写真撮影。
- 2月8日(水) エレベーション図、井戸測量など。
- 2月18日(土) 井戸写真撮影。1号堅穴床面まで掘り下げ。井戸周辺で溝2本確認。
- 2月19日(月) 石を入れた柱穴、溝など調査。
- 2月26日(日) 南へ拡幅。
- 3月1日(水) 堅穴住居跡の輪郭検出。
- 3月2日(木) 道構確認。堅穴住居掘り下げ。
- 3月3日(金) 作業実施。
- 3月4日(土) コメなどの炭化種実が散布した状況を確認。
- 3月5日(日) 上野晴朗氏が竈を調査。掘立の柱穴が列をなして検出された。
- 3月6日(月) 上野氏の案内で大場磐雄氏来跡。柱穴列を倉庫と推定。見学者多数。
- 3月8日(水) 前日豪雨、排水を行う。
- 3月9日(木) 堅穴内ピット掘り下げ。写真撮影。
- 3月11日(土) 掘立の平板測量、写真撮影。本日および前日、写真入りで新聞に報道されたため、見学者多数。
- 3月12日(日) 堅穴中心に平板測量、断面図作成。
- 3月14日(火) 断面図2本作成、堅穴周溝中の穴を探し、竈調査。
- 3月15日(水) 記念撮影、埋戻しを終え、作業終了。道具返却。
- 第1次調査を多大な成果を上げて終ると、同年12月、冬季間の農閑期、年末年始の休暇を待って第2次調査が準備、実施された。
- 12月16日(土) 郷土史研究会の準備会。
- 12月22日(金) 青年団、学生参加について準備、説明。
- 12月24日(日) 調査初日。表土除去。
- 12月25日(月) 残る表土除去。杭打設。
- 12月26日(火) 表土剥ぎの続きを行う。須恵器壺出土。土師器多数出土。
- 12月27日(水) 柱穴内から木材出土。
- 12月28日(木) 柱穴列、3号堅穴確認。遺物皆無。
- 12月29日(金) 大溝掘り下げ。堅穴さらに1軒検出。2号堅穴の続き。写真撮影。
- 平成26年1月6日(土) 堅穴内の精査。
- 1月7日(日) 調査区内の清掃。
- 1月8日(月) 柱穴内木材の取り上げ。大溝内掘り下げ。写真撮影。
- 1月15日(月) 写真撮影のために清掃し、写真撮影。
- 1月21日(日) 道跡発見届提出。平面図は本日で終了。
- 1月27日(土) 郷土史研究会発足。野澤氏による「江曾原遺跡について」の講演。
- 1月29日(月) 山梨県郷土研究会にて発表。
- 2月18日(日) 山梨県郷土研究会の臨地調査。
- 2月19日(月) 断面測量、堅穴・溝の補足調査。
- 昭和27年(1952)、野澤氏は「八幡村江曾原遺跡の研究」を『山梨県高校教育会研究報告』第1号に発表した。本来は詳細な各道構の平面図、断面図を添えた報告を提示する予定であったが、都合により図面類としては全体図のみとなっている。
- 第1次調査中には国学院大学大場教授が来探し、とくに掘立柱建物跡について倉庫の可能性を、また井戸については各地の事例との比較に関して教示している。また大溝を中心に出土した植物遺存体、獸骨(歯)に関しては早稲田大学の直良信夫氏に同定を依頼している。直良氏はその後、「日本古代農業発達史」(1956)のいくつかの項目中に江曾原遺跡出土資料をとりあげているが、イネをはじめ、コムギ、オオムギの穀類の他、ヒヨウタン、ゴガツササゲ、モモ、ウメ、コウメ、マンシュウアンズ、クルミなどがあることから、單に水稻栽培をしていただけではなく、コムギやオオムギを作り、果菜を植え、果実類を植栽する、一種の立体農業の経営が行われ、さらに仔山羊をも飼育する多角的な農業であったと指摘した。
- 野沢昌康氏の資料については、山梨県考古学研究会によって整理、一部資料の報告が行われたが、江曾原遺跡に関しては平野修氏が製塙土器片、「栗」の墨書き底部外面にもつ灰釉陶器碗、刻書(線刻)とみられる文字または記号を底部外面にもつ土師器杯皿、転用鏡とみられる須恵器壺片2を抽出し、図化している(平野2012)。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査は重機で表土を除去したのち、人力で遺構確認面を精査し、各遺構を掘り下げた。遺構出土遺物は通し番号を付けて光波測量機による計測を行い、取り上げた。各遺構は半裁またはベルトを設定し、断面実測、写真撮影後に完掘したが、断面図、エレベーション図は手取りで図化し、完掘後にラジコンヘリ、ポール撮影を行い、空撮写真から平面図の図化を行った。

野沢氏調査地点（C区）は、調査したところすべて徹底的に完掘され、埋め土で丁寧に埋戻しされていた。したがって土層断面等は残さずに完掘し、完掘状態を図化した。大溝については粘土管が残されている可能性が考えられ、また覆土中の植物遺存体の検出も期待されたが、東側は土手際まで調査済であり、一部覆土の土層が残っていたものの、粘土管、植物遺存体は見出すことができなかつた。

第2節 層序

地表面からの土層堆積状況については、6・8号竪穴、B区北壁の土層断面図を参照されたい。6号竪穴（第7図）では1層 灰黄褐色土（表土）、2層 褐色粘質土、3層 鈍い黄褐色粘質土で、遺構覆土は黒褐色粘質土である。8号竪穴（第8図）では1層 灰黄褐色砂質土、2層 鈍い黄褐色粘質土、3層 褐色粘質土で、黒褐色粘質土を遺構覆土とする。B区北壁（第14図）は旧水田面上に盛土がなされているが、盛土層、旧水田面以下は6層 褐色粘質土、7層 暗褐色粘質土、8層 鈍い黄褐色粘質土（地山、確認面）である。

第3節 遺構

2次にわたる調査地区は、幅3～10m、長さ125mの南北に細長い調査地区で、水路、道路に分断されて3地点に分かれているが、ここではそれらを北からA・B・C区として報告する。そのうち野沢昌康氏によつて調査された地点はC区北側にあたり、1号井戸から1号掘立の部分と完全に一致する。ここではC区の諸遺構については、野沢氏が昭和27年に報告した「八幡村江曾原遺跡の研究」（以下、野沢氏報告）をもとに各遺構に対して補足説明を加えることとする。

1号竪穴（第2～4図、図版4～6）

B区南寄りにあり、2・3号竪穴と重複する。当初、重複状況が明確ではなかったので、全体を1号竪穴と

して調査を進める過程で1・2号竪穴の竪、周溝が明らかになり、3軒の重複と判断した。ただし、1・3号竪穴の西・北壁のラインが不明瞭で、また竪も明確ではないため、推定線については不確定である。

竪穴は東側が調査区外にかかるため、約2/3程度が残り、南北5m、東西32m以上の隅丸方形で、床面までの深さはほとんどない。竪は北西隅にあるが、焼土が遺存する程度である。周溝は西・南壁にあり、幅25cm、深さ10cmを測る。調査区境には搅乱ビットが並ぶが、それらはブドウ棚支線である。床面には小ビットが多数存在するが、明瞭な配列は認められない。竪穴西側には3号溝がある。ちょうど1号竪穴を開むように存在し、1号竪穴の周堤帶外側を開む排水のための溝と考えられるが、北西側では1号竪穴推定ラインに接するため、位置関係が接近しすぎているようにも思われる。遺物は竪のある北側半分に多く出土する傾向がある。

2号竪穴（第2～4図、図版4～6）

B区南寄りにあり、1・3号竪穴と重複するため、全形は不明であるが、南北3.8m、東西3.4mの小形方形の竪穴で、床面までは15cmと浅い。北・西・南壁は残るが、1・3号竪穴と重なる東壁については、周溝の一部とみられる溝があり、住居プランを推定できる。竪は北壁にあり、焼土ブロックを伴う。西・南側に周溝があり、幅15～20cm、深さ10cmを測る。西壁に伴う周溝は2本存在し、一応、建替えに伴う周溝の重複とみておきたい。本竪穴を切るようにして1号竪穴に伴うと考えられる3号溝があることから、1号竪穴よりも古いとみられる。また南・西側には一部配列する柱穴群（22・28・30号ビット）があり、その継きとみられる柱穴（65号ビット）が本竪穴内に存在する。

3号竪穴（第2～4図、図版4～6）

B区南寄りにあり、1・2号竪穴と重複する。1・2号竪穴のプランを推定し、余った部分を3号竪穴としたもので、北側の壁は約3m分確認できたが、調査区外へのびている。床面レベルは1号竪穴とはほぼ同じである。竪は調査した範囲にはない。遺物は北壁際に形がわかる破片などが出ており、全体的には少ない。

4号竪穴（第5図、図版8）

野沢氏報告では「第1号堅穴住居址」として、以下のとおり報告されている（図6）。

粘土質のため保存状況が良く、壁も周溝も床面も剥げるようにして明瞭に出すことができた。壁は垂直に立ち、内側の周溝は西と北が幅広く、幅約30cm、深さ37cmである。周溝中には東壁側には2、南壁側に2、西壁側に3、北壁側に2の小穴がある。床面は平らで堅く、一面に甕が炭化して検出され、床上に敷いたものらしい。柱穴が大小4本あり、そのうち竈前の1本は大きく深いことから柱穴とは思われず、中央よりやや西側に南北に並ぶ2本は径27cm、21cm、深さ15cm、8cmで主柱かも知れない。残る1本は径18cm、深さ19cmで、小さい。他にも床面の焼土が大小2箇所、東壁に近くにある。竈は石組で、その床面はわざわざ粘土で叩き固めたように円形で真赤に焼き固まっていた。その真中に径17cmくらいの円孔があり、日下部遺跡の例から、石柱（支台、支脚石）の痕跡と考えられた（以上、野沢1952を改変）。

また野沢氏報告の堅穴住居址一覧表によれば、「形状-隅丸方形、方向-N40°E、寸法-3.6×3.6m、床深-25cm、周溝-床面よりの深さは7~13cm、溝中に柱孔9箇、窯-北壁東寄、窯構造-石組、真中に細長い石の立っていた痕あり 炉-東側に大小二ヶ所あり 炉構造-盆状の穴 柱穴-2ほど対照的 恐らくこの住居址所属 窯-窯の前方右手に大きい穴 径38、深32cm 焼土-窯及びその附近と前方の炉と思われる部分 遺物-土器師坏・碗等 須恵器-片 石-砥石断片1 鉄器-3他に不明なもの その他の遺物-姫ぐるみ、床面一面に炭化せる甕 その他-倉庫址

と重なり溝と一部分交わる」（以上、原文のまま）と整理されている。

本堅穴は3.8m×3.7mの隅丸方形で、ほぼ同規模の2号掘立と重複している。また中央には東西方向に棟瓦を伏せた暗渠排水が堅穴を切っているが、これは昭和25年の調査時にはないことから、昭和26年の調査以降に設置されたものといえる。

竈は発掘当初、石組であったが、今回の調査では石は遺存していないかった。昭和25年の調査後に除去されたものとみられる。周溝は竈を除き全周する。幅25~45cm、深さ10cmのやや幅広で、東壁が幅広くなっている。ピットは93~96の4本があるが、その配置は細長い矩形で、94のみが大きい。野沢氏は4本柱穴と考えたが、堅穴に伴なう柱穴にして浅い。遺物は皆無である。

5号堅穴（第6図、図版10）

C区中央南寄りにあり、7号堅穴を切り、3号掘立、16号溝と重複する。また堅穴東側は調査区外にかかるため、全体の約半分程度を検出した。なお、調査区外は畑の石垣となり、一段下がって通路となっていることから、遺構はこれ以上遺存していない。南北3.6m、東西2.1m以上の隅丸方形プランで、幅20cm、深さ10cmの周溝が全周する。竈は不明だが、北壁東寄りにみるとある。南側周溝中に160号ピットが重複し、先後関係は柱穴が周溝を切っているようである。16号溝については、覆土上層にあり、断面図には16号溝を掘り下げてから堅穴断面を観察した様子を図示している。7号堅穴より床面は深く、12cmの段差がある。

6号堅穴（第7図、図版10・11）

C区南寄り、調査区西壁にかかるようにして疊層面に検出された。堅穴の大半は調査区外にかかることから全形は不明だが、南北3.7mを測る隅丸方形で、床面までの深さは10cm。竈は北壁東寄りにあり、焼土面と右袖石の立石の一部が残るのみであった。周溝はない。床面は、疊層面を床面とし、平坦な硬化面はない。遺物は竈周辺および床面近くからやまとまって出土している。

7号堅穴（第6・7図、図版10）

C区中央南寄りにあり、5号堅穴、3号掘立、16号溝と重複する。5号堅穴に東壁を切られているため、堅穴の全形は不明だが、2.7×2.2m以上の小型隅丸方形で、床面中央には16号溝が0.7m幅で横断してい

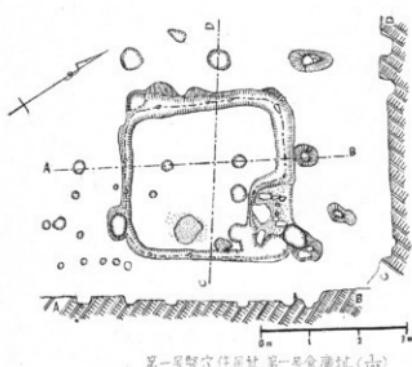


図6 旧1号堅穴住居址（4号堅穴）

る。また北西隅には127号ピットが重複する。竈は北壁東寄りに一部5号竪穴に切られて遺存する。1×0.7mの掘り方をもち、焼土層が残るのみで、石組などはない。

8号竪穴（第8図、図版9）

C区中央、東壁にかかるようにして存在し、竪穴の半分は調査区外にある。南北長5mの隅丸方形で、竈は未確認だが、北壁に想定される。調査区を竪穴の幅で約0.5m拡張してみたが、ちょうど調査区ラインで畑の石垣や東側の造成により、竪穴は欠失していることがわかった。床面までは40cmと比較的深い。また周溝は南・西・東壁に全周し、幅50~65cm、深さ10cmを測る。床面は顯著な硬化面ではないが全体に硬い。西側壁寄りから遺物が多数出土した。

9号竪穴（旧2号竪穴住居址）

C区北側、調査区西壁にかかるようにして存在する。野沢氏報告には次のようにある。

この遺跡の発掘で最初に手をつけた所で、無計画に掘られたためやや明瞭さを欠き、周溝、柱穴は認められなかつた。特色としては、内部に有機物の炭化物が多量に横たわっていた点で、屋根を葺いたと思われる蓋の炭化物が幅16cm、長さ60cmの広さで、厚さ2cmくらいの層をなしていたほか、板と思われる材が褐色の薄板となって乱雑に横たわり、板の大きいものは長さ2m余、幅20cm余りもあった（以上、野沢1952を改変）。

また竪穴住居址一覧表には、「形状・隅丸方形（や、ゆがむ） 方向-N40°E 寸法-3.6×3.4m 床深-16cm 周溝-不明 窯位置-北壁東寄 窯構造-石組 炉-なし 柱穴-なし 焼土-窯とその周辺 遺物-土師器壺、碗、盤等 禁惣器-壺片 石-小石数箇 鉄器-なし その他の遺物-板、蓋等の遺体、雜然と横たわる その他-倉庫址と重なり溝に中心を横切られている」（以上、原文のまま）とある。

今回の調査では竪穴としての痕跡をまったく見出すことはできなかった。

1号掘立柱建物（第10図、図版8・9）

野沢氏報告では「2号倉庫址」として次のように記載する。

南北に5本ずつ、3列が整然と並んだ柱穴配置を示し、柱穴は深く大きく（一辻34~61cm、深さ30~52cm）、おおむね四角形で、このうち2箇だけが小さく、配列

がされている。規模は大きく、遺物は甚だ少ないが、炭化した米、小麦が少量である柱穴などから採取できた事などから倉庫址と考えられる。反面、倉庫としては1ヶ所に集まりすぎ、倉庫としての遺物が出ていないこと、既にこの時代には平地住居があったこと、火を燃やした跡が近くにあること等から、平地住居の可能性も捨てきれない（以上、野沢1952を一部改変）。

4間×2間の南北に長い掘立柱建物跡で、南北5.5m、東西3.5mを測る。柱穴の平面形は、野沢氏報告にもあるように隅丸方形に近いものが多く、直径もしくは長軸長55~75cmの円形、隅丸方形である。それらのうち、東寄にあたる76~78号ピットは中段をもつ2段の底面になっている。84号ピットと76号ピット間に87号ピットを置くが、78・82号ピット間、77・83号ピット間にはない。したがって2間×3間の側柱掘立柱建物の北側に1間分庇を追加した構造といえる。建物内には17号溝のほか、105~107・175号ピットが存在する。いずれも野沢氏により調査、図示されており、さらには80・175号ピットから17号溝の南側にかけて焼土層の分布が図示されているが、今回の調査では再確認することはできなかった。この点について野沢氏は炉跡の可能性も捨てきれないとしているが、2号掘立柱が火災焼失した痕跡であろう。

出土遺物としては、野沢氏報告の2号倉庫址の表中、柱穴中の遺物には「南部から炭化米、小麦少々、2ヶづ、石の入っていた穴2つ、須恵の大きい破片の入っていた穴1つ」とある。南側の柱穴に炭化種実が認められたということであり、焼土層と炭化種実との関連性が窺がえる。

2号掘立柱建物（第5図、図版8）

C区、4号竪穴と重複して存在する2間×2間の建物跡である。野沢氏報告では「1号倉庫址」とし、1号住居址（今回報告の4号竪穴）と重なり、西側と北側に3本ずつ、東南隅に1本、特に太く深い柱穴（径50cm前後）がある、と報告されている。

再調査された2号掘立柱は2間×2間の方形柱穴列である。北側に3本（90~92号ピット）、西側に3本（88~90号ピット）、南側に2本（88・97号ピット）、東側に3本（92・97・204号ピット）があり、3本配置を基本とするが、そのうち間に配置する89・91・204号ピットは両脇のピットに比べ浅い。また88・97号ピット間の柱穴は確認できなかったが、これは柱穴の深度が浅いといったことも確認できなかった要因であろう。

建物規模は3.8 m × 3.8 mで、柱間は1.8 ~ 2.2 mである。各柱穴（ピット）は隅丸方形に近い円形で、88 ~ 91号ピット底面には柱痕状の落ち込みがある。深さは四隅にあたるものは55~60cmと深い。間に配置するピットは15~20cmと浅い。遺物は皆無であった。野沢氏報告の倉庫址一覧表には、1号倉庫址の柱穴中の遺物として、「炭化米少々 西北の最大の柱穴中には径十数個の石2箇 但これは柱の動きをとめるためのものらしく石のあき間から察すると、柱は穴にくらべると甚だ小さいもの、ようである」とある。

3号掘立柱建物（第6図）

C区中央、やや南寄りに位置する。北側に5・7号竪穴が重複する。134・138・140・150・160・164号ピットをつなぐ1間×2間の柱穴の配列を方形建物と認定したが、柱配置にやや難がある。東西3.3 m、南北3.4 mで、柱穴の大きさは径20~60cm、深さは15~60cm、四隅の柱穴は深く、掘立にふさわしい規模をもつが、中間の134・140号ピットはやや浅く、1号掘立の構造に似ている。16号溝が3号掘立の北側を巻くようにして湾曲し、雨水除けの排水溝とも考えられるが、3号溝や1号井戸周辺の溝に比べると太く、類似性は弱い。16号溝、3号掘立とともに竪穴を切ることから新しくみられるが、主軸方向は竪穴とは同じであり、時期的には5・7号竪穴の時期に近いと考えられる。

1号井戸（第11図、図版7）

野沢氏報告には次のようにある（図7）。

井戸は深さ113cm、上面直径164cm、底面直径89cm、上部が著しく聞く円筒形で、底面は粘土層をつきぬけた砂礫層にある。井戸側板は何もない素掘りで、底面に30cm四方くらいの板材あり、その上に小石が堆積している。現在は地下水位が当時にくらべると著しく下がったため湧水はないが、当時は砂礫層からの湧水が相当あったらしく、それが高さを少しづつ異にする4ヶ所の出口から3本の溝で流したのではないか。3本の水路は更に1本の粘土管へ集まり3mほどで大溝中の粘土管に接続している。この遺構を井戸と考えた根拠はその構造にあるが、現在の井戸と最も違う点は甚だ浅い点である（以上、野沢1952を改変）。

上端直径1.4 × 1.5 m、下端直径60 × 85cm、深さ1.05 mの素掘りで、断面形はラッパ形を呈している。底面には径約10~20cmの礫が露出する。底面に近い土層は礫層をなし、湧出が認められた。井戸とするにはかなり浅いものの、井戸と考えてよからう。5号溝から

は4.5 m離れ、両者間には西側に6号溝が曲がりながら存在し、直につなぐようにして8号溝があり、また8号溝の中間から9号溝が派生するほか、13号溝が8号溝につながっている。また東西方向を繋ぐようにして7・10・15号溝が存在する。それらの溝を野沢氏は井戸から大溝へ排水するための溝とみなしたが、井戸、5号溝、各溝の時期がわからないため、それらが同時に存在して有機的なつながりをもっていたのかどうか、定かではない。ただし平安期とみられる5号溝（大溝）に各溝が取りついでいることから、溝どうしの関連性を認めることはできる。カーブした6号溝が1号井戸を囲うようにして存在することから、雨水等の排水用の溝であった可能性は十分考えられる。

1号土坑（第13図、図版11）

C区ほぼ中央にある北向きの長方形土坑である。長軸1.6 m、短軸長0.74 m、深さ46cmで、棺を埋めたような掘り方をもち、底面には一部礫層面が露出している。埋葬墓であれば、北頭位であろうか。

2号土坑（第13図）

C区ほぼ中央、西壁寄りに位置する。2.9 × 2.3 mの楕円形土坑で、深さは20cm。遺物は少ない。

3号土坑（第5図）

C区やや北寄り、4号竪穴南にある不整楕円形の土

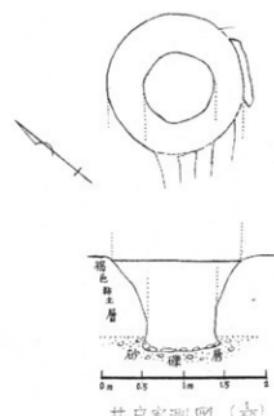


図7 井戸実測図

坑。1.3 × 1 m、深さ 60cm。

1号溝（第8・9図、図版3）

1次調査のA区で検出された南北方向の23.5mの直線的な溝で、北33°東に振れています。現状の農道と平行するようにして存在し、現状の農道に面した土手（畔）の直下にある。上層には多量の礫が堆積し、2号溝にも同様に礫が堆積していたが、礫を外すと下層から溝の両側に積み上げたような石積が検出された。2号溝との接続部分では、1号溝に取り付くようにカーブを描いて1号溝の石積が配列されている。また2号溝より北側では溝を礫で埋めるように更に多量の礫が堆積していた。溝の断面形は第8図にあるように石積の片側のみが検出された状況であるが、3~4段の礫を50~60cm程度積み上げ、北から南へ流下するようになっている。現状の農道以前の水路とみられ、条里地割を反映したものとみられるが、時代的には古代にさかのぼるものではない。溝の幅は調査区外にかかるため不明であるが、掘り方部分を含めて1~2m以上である。またA区中央では、セメント板で蓋をした現代の暗渠が1号溝を切っている。

2号溝（第8・9図、図版3）

A区北寄りにある東西溝で、1号溝とはほぼ直角方向である。西壁にかかり、東側は1号溝に接続し、西から東へ流下する。上層に多量の礫が堆積し、それらを除去したところ、下層から2列の石列が検出され

た。溝の幅は18m程度で、内部に幅50~80cm、深さ35cmで、石を1~2段積み上げた石列を設けている。東端では1号溝にカーブを描くように接続している。

3号溝（第2・3図、図版5）

B区南寄りの1号竪穴を取り巻くようにして存在する溝で、傾斜が高い西側にのみC字形に巡っている。1号竪穴とは北側推定プランにやや接しすぎているようにもみられる。2号竪穴と重複するが、覆土上層を切っていることから、2号竪穴よりは新しい。この溝が1号竪穴に伴うとすれば、雨水を避けるための排水溝であり、竪穴のプランと溝の間は1.6m離れているが、これは竪穴周堤帯の幅を意味するものであろう。溝の形はそういった視点で見直すと、竪穴の隅丸方形プランを一回り大きくした隅丸方形の形である。後述する1号井戸にも同様な溝が西側に巡っていることから、雨水対策として高い側に溝を巡らすことが行われ、とくに1号井戸と1号竪穴は同様の溝をもつこと、近い位置に存在することから、居住者、所有者が同じ、または時期が同じであるなどの関連性が想定できる。

4号溝（第14図）

B区中央南寄り、3号竪穴側にある東西溝で、長さ90cm、幅10~20cm、深さ12cm。

5号溝（第11図、図版7・8）

5号溝は野沢氏報告でいう大溝にあたり、以下のよ

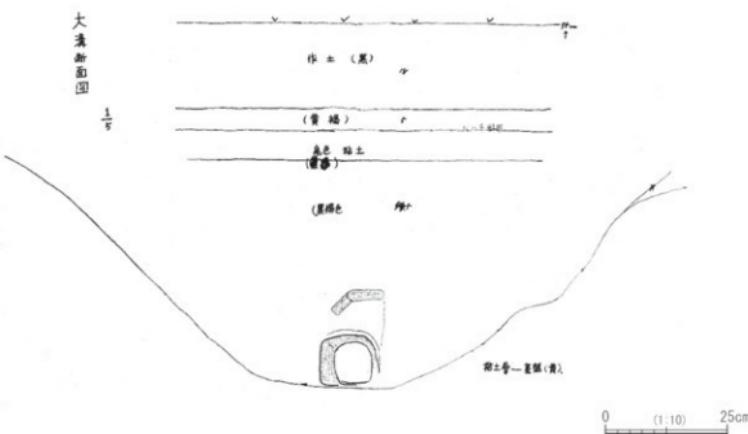


図8 大溝内粘土管の様子

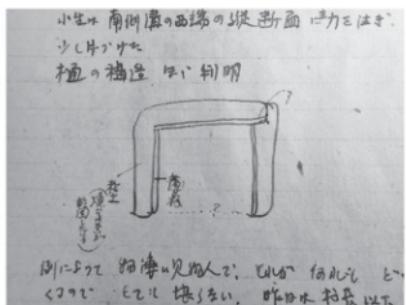


図9 粘土管の概略図

うに記載されている（図8は調査記録原図）。

大溝の西端には湧水地点が2ヶ所あり、これらが一緒にになって一度貯められ、そこから粘土管に導かれている。湧水口附近の溝には大きい石が沢山あり、大溝底にある多数の石は、その上に粘土管を走らせたもので、所々に薄い板材があったことを併せて考えると、土管の両側にも石を並べ、その上を板で覆つたものであろう。溝中からは多量の植物遺存体が出土した。溝は粘土管で水を導くだけのものとしては大きい事などから、後に土管を通し、埋設したのではないか。井戸から流出した水を集め土管は、この溝に直角に接続する。この溝は深くて狭く、全く土管埋設のために掘られたものと思われる。粘土管は幅13cm、長さ約30cm、厚2cmくらいに粘土を乾燥させて内側に横の薄板をはりつけたものを四枚併せて四角にしたもので（図9、野沢氏野帳より）、底面の部分は板張りであった（以上、野沢1952年を改変）。

長さ7.5m以上、幅1~1.7mの断面V字状の溝で、深さ40~60cmであり、東側には溝底に溝状の落ち込みがある。東側はともに調査区外にかかるが、野沢氏調査により西側についてはさらに10mのびて2つの湧水地点に分岐する。つまり西側の湧水地点から東へと流下する溝であり、調査区外の西側に粘土管が埋設されていたということになる。溝内部には礫が散在したようであるが、底面に貼り付くような礫を除き、ほとんど除去されていた。

6~10・12~15号溝

C区北側、1号井戸周辺および5号溝北側の溝で、いずれも1号井戸と5号溝に関連した複数の溝である。まず6号溝は野沢氏調査でさらに北側にカーブして伸びている様子が調査されているが、1号井戸を開

うような溝である。B区1号堅穴西側にみられた溝と同様に、施設外周の高い側に溝を巡らしたものである。井戸と5号溝をつなぐようにして8号溝が存在し、8号溝と重複するように12・13号溝がある。8号溝については、野沢氏は井戸の湧水を高さに応じて大溝（5号溝）へ流すための溝と捉えている。また7・10・15号溝は8・12・13号溝と直交する2本の溝である。これらは井戸の上屋を想定した場合、雨落ち溝、排水溝に相当する施設と考えられ、点在するピットの一部は建物の柱穴となるかもしれない。野沢氏の野帳にもそうした想定が図示されている。今回の調査区内では6号溝は長さ6.5m、幅40~50cm、深さ20cm。8号溝は長さ5.2m、幅35~50cm、深さ50cmで、10・15号溝接続部分で屈曲し、南側の5号溝寄りが井戸側よりも深い。8・12・13号溝はほぼ同じような深度で、13号溝のあり方をみると1号井戸を越えた北側にもさらにつび、1号井戸と一体の溝というよりは重複した溝とも考えられる。15号溝は10号溝と方向的には同じ東西溝であるが、直線的ではなく、わずかにズレを生じている。長さ25m、幅15~20cmの細い溝である。10号溝は8号溝の屈曲点から派生し、東壁にかかる溝で、長さ1.6m以上、幅30~35cm、深さ15cmである。14号溝については、シミに近い浅い溝状落ち込みがあり、野沢氏調査では発掘されていない。

11号溝（第5・11図）

旧2号堅穴（9号堅穴）付近から5号溝に斜めに流下する直線的な溝。図では2枚に分断されているが、4号堅穴の北西隅にかかり、調査区西側に延びている。長さ8m、幅10~20cm、深さ10cm。

16号溝

C区中央西寄り、5・7号堅穴を切るようにして重複するカーブした溝で、5号堅穴上層にも存在したが、図化していない。長さ8m以上、幅70~90cm、深さ20cmで、断面形はポール状。1号堅穴、1号井戸の雨水除けの排水溝と同様な施設のようであるが、溝の内側には3号掘立があるものの、溝の規模が違うなど、排水施設と俄かに断定することはできない。

17号溝（第10図、図版9）

C区1号掘立内にあり、81~83号ピットとほぼ平行するようにして存在するが、直線的ではなく、やや蛇行している。また小ピット、溝状構造が脇に存在する。長さ3.1m、幅15~30cm、深さ6cm程度である。

18~20号溝（第12図、図版11）

C区南側にある東西溝で、西側は調査区外にのび、東側は地境溝まで達している。2本の溝が交差したような姿、あるいは途中で分岐したような形であり、新旧の切り合い関係は不明である。ここでは中间の分岐点から西側を20号溝、東側の南を18号溝、北を19号溝とした。18号溝は幅30cm、19号溝は幅20cm、20号溝は幅30~40cmで、深さは18・19号溝が10cm、20号溝が13cmである。

その他

ピットはA区中央、B区1~3号竪穴周辺、C区のはば全域にわたり分布する。掘立柱建物に伴うピットとしては、1~3号掘立のほか、1・2号竪穴西側のピット群に、2列程度の列状配置が認められ、掘立柱建物になる可能性がある。ただし、対称的な配置が認められないことから掘立とはしていない。深さも掘立とするにはやや浅い。

第4節 遺物

ここでは2013年の第1次・2次調査分を報告するとともに、昭和25・26年の野沢氏調査資料についても触れる。

1号竪穴（第15図、図版14）

1~8は土師器坏。8~11は土師器壺。12は土師器置き壺。13は須恵器壺または壺。土師器坏には玉縁口縁の3・5・6、口唇部が丸くなりつつある2などがあるが、概して玉縁化した段階であり、10世紀前半代といえる。8・9は小形壺、10・11は通常のサイズの壺である。

2号竪穴（第15図、図版14）

1は土師器坏、2・3は土師器壺。2・3はハケメをもつ壺ではなく、ナデで調整されたものである。

3号竪穴（第15図、図版14）

1~3は土師器坏で、底径がやや大きく、器壁の立ち上がりが急で、内面に放射状暗文をもつ9世紀前半期頃の甲斐型土器である。体部下半のヘラ削りは明確ではないが、横に長い特徴がある。

4号竪穴（第15図、図版15）

1は暗渠覆土中出土であり、昭和25年の調査後の埋戻しのち、暗渠を造成した際に混入した近現代の銀

メッキ（ニッケルメッキ）された筒状銅製品である。

5号竪穴（第15図、図版15）

1は土師器坏。2は須恵器蓋。

6号竪穴（第16図、図版15）

1・2は土師器皿、3~8は土師器坏。9は土師器小形壺。11は壺底部または壺形土器。土師器坏のうち4・7は内黒の黑色坏である。坏皿類はいずれも玉縁が発達した段階のものである。玉縁で内面に暗文をもつ黒色土器の7は、暗文をもつ点で古い要素を残すが、他のものと同時期であろう。11は壺底部の可能性もあるが、底面にあたる部分がわずかに湾曲することから、壺形、あるいは壺形の可能性があり、逆位で実測図を作成した。底部外面の立ち上がりらしき部分にもハケメがわずかに認められる点は、底部かどうか疑問を抱いた部分である。

7号竪穴（第16図、図版15）

1は土師器坏。2・3は土師器壺で、3はロクロ壺とみられ、内外面のハケメ調整がない。

8号竪穴（第16・17図、図版15~17）

土師器坏皿類が多い。1~7は土師器皿、8~16は土師器坏。17は土師器小形壺。18・19は土師器壺。20は土師器置き壺。21は土師器高台付きの皿。22は土師器蓋。23~25は須恵器壺・甕。土師器皿は、体部内面に屈曲があり、段皿の名残を留めている。口縁部は玉縁に移行しつつあるもの、玉縁化したもの（6・7）がある。1は内面に漆状の黒色付着物が付き、5は灯明皿に用いたらしく、口唇部内外面に黒色付着物がある。

坏は口縁部が玉縁化しつつあるものを主とし、14~16は内面に暗文をもち、黒色処理がなされた黒色坏である。それらのうち14は内面を5弁の花弁状暗文とし、また16は内面見込部にらせん状渦巻文を施している。19の壺底部は、底部から急に聞く鉢系壺である。また21は内外面黒色処理された高台付き皿。23・24は須恵器または灰釉陶器である。

土坑

2号土坑（第17図、図版17）

1は土師器皿、2は土師器坏。3は土師器壺、4は土師器置き壺。5は須恵器壺。6は水晶結晶で、斜めの破断面に使用痕（磨り面）をもつ。7は鉄滓。

表2 土坑・ピット一覧表

(単位はcm()は現存値)

遺構名	長径	短径	深さ	遺構名	長径	短径	深さ	遺構名	長径	短径	深さ	遺構名	長径	短径	深さ
1土	160	76	51	51ピ	23	23	11	104ピ	21	20	13	157ピ	20	20	5
2土	287	225	20	52ピ	50	38	31	105ピ	53	48	11	158ピ	18	18	3
3土	132	99	71	53ピ	(38)	(32)	22	106ピ	30	27	30	159ピ	22	20	28
1ピ	25	22	34	54ピ	20	18	7	107ピ	39	38	27	160ピ	38	35	37
2ピ	17	17	11	55ピ	28	21	26	108ピ	44	40	14	161ピ	28	26	28
3ピ	35	35	13	56ピ	47	36	15	109ピ	40	31	6	162ピ	26	20	27
4ピ	33	32	18	57ピ	35	28	28	110ピ	16	13	6	163ピ	80	52	37
5ピ	16	16	9	58ピ	67	41	13	111ピ	24	23	13	164ピ	55	55	20
6ピ	37	34	6	59ピ	59	47	24	112ピ	18	16	5	165ピ	31	23	10
7ピ	51	37	30	60ピ	27	26	15	113ピ	22	20	6	166ピ	26	24	13
8ピ	(37)	(28)	30	61ピ	39	35	30	114ピ	29	24	10	167ピ	22	15	8
9ピ	38	31	12	62ピ	24	22	10	115ピ	62	40	15	168ピ	32	30	15
10ピ	(44)	(59)	20	63ピ	45	38	44	116ピ	38	36	25	169ピ	48	40	14
11ピ	64	59	25	64ピ	34	33	18	117ピ	32	30	9	170ピ	40	35	12
12ピ	48	33	16	65ピ	63	48	21	118ピ	17	14	15	171ピ	24	20	12
13ピ	51	48	26	66ピ	24	18	22	119ピ	29	29	14	172ピ	47	39	12
14ピ	35	34	22	67ピ	65	38	15	120ピ	22	20	4	173ピ	80	60	38
15ピ	24	17	37	68ピ	28	22	24	121ピ	95	77	50	174ピ	50	45	13
16ピ	23	20	5	69ピ	21	18	16	122ピ	47	34	18	175ピ	30	27	6
17ピ	19	18	4	70ピ	57	20	23	123ピ	26	22	7	176ピ	29	23	16
18ピ	18	16	21	71ピ	31	28	25	124ピ	74	48	12	177ピ	45	—	16
19ピ	33	29	8	72ピ	38	36	12	125ピ	52	37	20	178ピ	67	62	19
20ピ	24	23	7	73ピ	81	46	28	126ピ	60	42	9	179ピ	20	20	9
21ピ	27	26	15	74ピ	41	21	29	127ピ	100	100	33	180ピ	16	15	5
22ピ	64	57	24	75ピ	80	66	32	128ピ	39	38	14	181ピ	46	42	6
23ピ	24	21	5	76ピ	62	56	44	129ピ	22	21	12	182ピ	34	33	8
24ピ	15	14	4	77ピ	77	57	49	130ピ	31	25	14	183ピ	19	15	10
25ピ	24	24	20	78ピ	60	54	43	131ピ	17	16	14	184ピ	26	25	20
26ピ	13	13	19	79ピ	66	62	48	132ピ	41	36	20	185ピ	14	13	16
27ピ	29	26	24	80ピ	68	61	35	133ピ	26	25	22	186ピ	17	15	6
28ピ	58	53	30	81ピ	64	58	30	134ピ	80	52	38	187ピ	35	24	18
29ピ	36	34	45	82ピ	67	59	28	135ピ	54	54	40	188ピ	26	25	38
30ピ	90	62	23	83ピ	56	55	27	136ピ	35	34	11	189ピ	26	25	20
31ピ	71	70	35	84ピ	55	51	32	137ピ	52	52	30	190ピ	37	22	17
32ピ	58	56	17	85ピ	48	41	20	138ピ	80	80	51	191ピ	44	42	22
33ピ	51	45	14	86ピ	50	40	27	139ピ	21	20	8	192ピ	26	25	10
34ピ	77	70	40	87ピ	67	67	22	140ピ	49	36	23	193ピ	26	24	23
35ピ	38	34	15	88ピ	96	88	61	141ピ	35	30	15	194ピ	20	18	8
36ピ	25	22	6	89ピ	73	59	27	142ピ	83	56	28	195ピ	20	15	7
37ピ	44	41	18	90ピ	102	63	52	143ピ	24	23	9	196ピ	48	35	5
38ピ	47	46	17	91ピ	82	80	25	144ピ	40	40	11	197ピ	25	23	8
39ピ	23	19	11	92ピ	70	53	39	145ピ	71	59	46	198ピ	56	31	12
40ピ	18	17	25	93ピ	38	36	15	146ピ	58	54	15	199ピ	28	26	19
41ピ	46	29	9	94ピ	44	41	31	147ピ	80	72	9	200ピ	20	16	18
42ピ	20	18	10	95ピ	31	26	9	148ピ	34	34	7	201ピ	17	17	4
43ピ	(44)	(22)	11	96ピ	26	22	12	149ピ	28	24	12	202ピ	16	15	8
44ピ	20	19	10	97ピ	67	56	56	150ピ	47	36	56	203ピ	17	15	6
45ピ	18	17	8	98ピ	62	41	30	151ピ	25	25	21	204ピ	67	56	17
46ピ	23	21	19	99ピ	45	40	37	152ピ	35	35	23				
47ピ	19	13	10	100ピ	22	22	25	153ピ	101	95	8				
48ピ	27	26	19	101ピ	20	18	10	154ピ	72	45	54				
49ピ	49	44	16	102ピ	20	17	6	155ピ	45	39	18				
50ピ	31	29	4	103ピ	20	17	7	156ピ	47	41	16				

ピット（第17・18図）

58号ピット1は土師器坏、2は土師器壺。59号ピット1は土師器坏。やや厚い器壁から古手であろう。67号ピット1は土師器壺底部付近。ハケメをもたない。70号ピット1は須恵器壺。86号ピット1は土師器坏。125号ピット1は古墳初頭の台付壺脚部。141号ピット1～3は土師器皿、4は土師器坏、5は土師器小形壺、6・7は土師器壺、8は置き竈。152号ピット1は土師器甲斐型坏で、見込み部にも放射状暗文をもつ9世紀第1四半期頃のもの。168号ピット1は土師器壺または壺で、図の傾き等は不明だが、何らかの大形容器片である。178号ピットは灰釉陶器壺で、小破片から復元図のため、図は確かではない。

溝

1号溝1は土師質土器の擂鉢。中世、15・16世紀か。2号溝1は近世磁器碗。2は鉄砲玉。3は凹み石で、凹みは浅い。4号溝1は甲斐型土師器坏。5号溝1～3は甲斐型土師器坏、4・5は壺、6は置き竈であろう。7～9は鉄製釘とみられる。16号溝1は土師器坏。2は瓦質土器で器種は不明。18号溝1は須恵器蓋で、箱形を呈した断面形である。20号溝1・2は土師器坏、3は須恵器坏。

遺構外・表探・搅乱

遺構外1は焼成粘土塊であるが、土師器等の胎土とは異なる。2・表探1は古墳初頭の台付壺脚部。搅乱1は灰釉陶器壺または横瓶の把手。県内での類例は少ない。

野沢コレクション（第20～22図）

野沢氏調査での報告では、出土遺物を遺構別に図示していないため、各窓穴の時期を知ることはできない。野沢氏報告では土器（土師器）、植物遺体、動物化石、鉄器、砥石などが出土したこと、土師器類が比較的少なく、完形品が坏等の3点程度であったことが記されている。土師器類は大溝、竈から多く出土したといい、焼成、胎土、文様、形態等から第1～3類に分類されている。野沢氏は第1類を壺形土器、第2類を甲斐型坏、第3類を第2類よりもやや厚手で、器形

が大きい類とし、第2類に含まれるかもしれないとしている。第1類には深鉢形（堀）を主とし、釜（羽釜）、かまと（置き竈）があることを指摘している。そのほか「頗る大形の奇妙な形の破片」があるというが、置き竈の破片であろうか。第2類には内面黒色処理され、花弁状暗文をもつ坏の存在に注目したほか、燈明皿に使われたらしい土師器が相当数存在すること、底部については「へら切、糸切、ろくろ切あり、高台もごく低いものと高いものとあり雑多で末期的様相」を呈すとして、日下部遺跡より年代的に若干新しい様相を読み取っている。型式的には「国分式」であり、奈良時代から平安時代にかけてのものと推測した。また墨書き土器は数個があったが、判読できたものに「王」があつたと記している（なお野沢コレクションでは未確認）。そのほか須恵器の完形に近い水瓶形のもの（いわゆる壺G類）、壺器（灰釉陶器）があり、須恵器の底部には「米」の墨書きがあるものがあった、とされる。この点については、灰釉陶器皿の底部外面に「栗」と記された墨書き土器が存在する（平野 2012）。

今回、山梨県立考古博物館所蔵の野沢コレクションのうち、江曾原遺跡出土品を一部図化した（第20～22図）。これらは1～8号窓穴出土土器とほぼ同じ様相をもち、9世紀後半～10世紀前半代の時期を中心としている。1～33は土師器皿坏類、34～41は土師器壺類、42～50は灰釉陶器皿碗壺類、53～57は須恵器壺、58は不明土製品、59～61は砥石である。土師器坏に内黒暗文が目立つか、42の段皿、51の壺G類などが特徴的である。また61の砥石には側面を貫通する孔と上から開けられた孔が破損部で交差している。

そのほか植物遺存体については、大溝を中心に出土したほか、1・2号倉庫址、1号窓穴竈から出土したとあるが、各地点からの出土資料が一括して報告されているため、具体的にどの遺構から何が出土したのかが分からなくなっているものの、直良信夫氏の著作の平面中のメモ書きの内容から出土した状況がわかる（図4）。野沢氏報告には壹が旧1号窓穴（4号窓穴）から、動物遺体のうち蒙古野馬の歯が大溝（5号溝）から、山羊下顎が旧第2号窓穴（9号窓穴）付近からの出土と記されている。

表3 土器・陶磁器觀察表

圖版 地點 No.	地點 種別	器種	口底/高(cm)	口底/底長	斷形找外/內底	色調	外/內	胎土	殘存 率%	燒成 率%	注記	備考
15.185	1.上66	瓶	(10.6)/-	(4.0)	ナデナデ/-	青	外	青	100	94.248+272		
15.185	2.上66	瓶	(12.0)/-	(3.8)	ナデナデ/-	青	外	青	100	94.111+255		
15.185	3.上66	瓶	(11.0)/-	(4.35)	ナデナデ/-	青	外	青	100	94.107		
15.185	4.上66	瓶	(12.2)/-	(2.8)	ナデナデ/-	青	外	青	100	94.007		
15.185	5.上66	瓶	(14.0)/-	(2.1)	ナデナデ/-	青	外	青	100	94.190	輕	
15.185	6.上66	瓶	(13.8)/-	(2.2)	ナデナデ/-	青	外	青	100	94.180	輕	
15.185	7.上66	瓶	(16.0)/-	(2.2)	ナデナデ/-	青	外	青	100	94.200	輕	
15.185	8.上66	甕	(10.4)/-	(8.0)	ナデナデ/ナメテ/水裏痕	青	外	青	100	95.285+1.938	下268+279	
15.185	9.上66	甕	(11.6)/-	(12.1)	ナデナデ/ナメテ/-	青	外	青	100	94.238		
15.185	10.上66	甕	(18.2)/-	(3.3)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.280		
15.185	11.上66	甕	(10.6)/-	(6.7)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.291		
15.185	12.上66	甕	-/-/-	-/-/-	タダナ/ナメテ/-	灰	外	白	100	94.111	輕	
15.185	13.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	タダナ/ナメテ/-	灰	外	白	100	94.263		
15.285	1.上66	瓶	(9.6)/-	(3.1)	ナデナデ/-	青	外	青	100	94.33		
15.285	2.上66	瓶	(9.6)/-	(4.5)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.32		
15.285	3.上66	甕	-/(10.0)/(5.6)	-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.274	輕	
15.385	1.上66	瓶	(10.6)/(5.0)	4.4	ナデナデ/ナメテ/-	青	外	青	100	94.67	94.190	下280
15.385	2.上66	瓶	(12.0)/-	3.1	ナデナデ/ナメテ/魚切	青	外	青	100	94.69	71.16	285+297
15.395	3.上66	瓶	(11.7)/-	5.3	ナデナデ/ナメテ/魚切	青	外	青	100	94.732	5.54	
15.395	4.上66	瓶	(15.0)/-	(3.8)	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.687	7.16	295+297
15.395	5.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.663	輕	
16.685	1.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.464		
16.685	2.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.345		
16.685	3.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.356		
16.685	4.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.346		
16.685	5.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.357		
16.685	6.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.358		
16.685	7.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.359		
16.685	8.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.360		
16.685	9.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.361		
16.685	10.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.362		
16.685	11.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.363		
16.685	12.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.364		
16.685	13.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.365		
16.685	14.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.366		
16.685	15.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.367		
16.685	16.頂盤	甕	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/系切	青	外	青	100	94.368		
16.785	1.上66	瓶	(11.8)/-	(4.3)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.379		
16.785	2.上66	瓶	(11.0)/-	(3.1)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.380		
16.785	3.上66	瓶	(13.6)/-	(5.0)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.381		
16.785	4.上66	瓶	(14.8)/-	(2.9)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.382		
16.785	5.上66	瓶	(13.0)/-	(2.7)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.383		
16.785	6.上66	瓶	(14.0)/-	(4.0)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.384		
16.785	7.上66	瓶	(12.0)/-	(3.7)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.385		
16.785	8.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.386		
16.785	9.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.387		
16.785	10.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.388		
16.785	11.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.389		
16.785	12.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.390		
16.785	13.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.391		
16.785	14.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.392		
16.785	15.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.393		
16.785	16.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.394		
16.785	17.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.395		
16.785	18.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.396		
16.785	19.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.397		
16.785	20.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.398		
16.785	21.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.399		
16.785	22.上66	瓶	-/-/-	-/-/-	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.400		
16.885	1.上66	瓶	(14.6)/-	(1.6)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.504		
16.885	2.上66	瓶	(14.2)/-	(2.5)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.511	與黑531	
16.885	3.上66	瓶	(15.2)/-	(4.7)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.507		
16.885	4.上66	瓶	(-)(5.4)/-	(2.8)	ナデナデ/木裏痕	青	外	青	100	94.517		

表4 石製品観察表

図版	地 点	掲載 No.	分 類	長/幅/厚(cm)	重さ(g)	石 材	色 調	注 記	備 考
17	2土	6	水晶	5.3/1.4/1.1	14.6	石英		24/342	研磨面有り
19	2磨	3	閃石	10.4/9.8/8.4	1240.0	安山岩	灰黄褐色	25/15	

表5 土製品観察表

図版	地 点	掲載 No.	種 别	時 期	長/短/厚cm 口/底/高cm	重さg	色調 外/内	胎土	残存率 %	施 成	注 記	備 考
19	瀆構外	1	焼成粘土塊	不明	4.0/3.9/2.7	31.8	赤褐色	密、白	良	外21		

表6 金属製品観察表

図版	地 点	掲載 No.	種 別	材 質	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	注 記	備 考
15	4無	1	不明	鋼?	2.3	1.8	0.09	4.7	48/333	
17	2十	7	铁片	铁	6.1	4.1	1.10	44.5	2±343	
19	2磨	2	鉄鉱石	鉄	1.1	1.1	1.1	7.0	25/199	
19	5磨	7	钉	铁	5.3	0.9	0.7	4.8	52/556	
19	5磨	8	钉	铁	4.7	0.6	0.6	2.0	52/556	
19	5磨	9	钉	铁	3.0	0.9	0.5	1.2	52/556	

表7 野沢コレクション 土器・陶磁器観察表

図版	点	№	種 別	器 様	口/底/高(cm)	形態特徴	外/底	色 調 外/内	胎 土	残存率 %	施 成	其 記	備 考	
20	古跡原	1	土器	瓶	(12.8)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	25	良	15-1		
20	古跡原	2	土器	瓶	(13.0)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	20	良	15-1		
20	古跡原	3	土器	瓶	(12.0)/(4.6)/2.3	ナメ付・角付・テグス・ハラ削付	明褐色	褐、白・白	粗	20	良	15-1		
20	古跡原	4	土器	瓶	(13.0)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	20	良	15-1		
20	古跡原	5	土器	瓶	(12.0)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	20	良	15-1		
20	古跡原	6	土器	瓶	(13.0)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	20	良	15-1		
20	古跡原	7	土器	瓶	(13.0)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	20	良	15-1		
20	古跡原	8	土器	瓶	(13.0)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	20	良	15-1		
20	古跡原	9	土器	瓶	(12.2)/4.8/2.3	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白・灰	粗	30	良	15-3		
20	古跡原	10	土器	瓶	(7.4)/--	ナメ付・角付	褐	褐、白・白	粗	良	15-3			
20	古跡原	11	土器	高台瓶	(7.4)/--	ナメ付・角付	褐	褐、白・白	粗	良	15-3	擦付		
20	古跡原	12	土器	瓶	(7.1)/--	ナメ付・角付・テグス・テナ	明褐色	褐、白・白	粗	良	15-4			
20	古跡原	13	土器	瓶	(16.0)/5.1/4.2	ナメ付・角付・テグス・テナ	明褐色・浅黄褐色	褐、白・白	粗	45	良	15-2		
20	古跡原	14	土器	瓶	(12.0)/5.0/2.1	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	良	15-3			
20	古跡原	15	土器	瓶	(12.0)/5.0/2.3	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白・灰	粗	15-2	擦付不明顯			
20	古跡原	16	土器	瓶	(13.0)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白・灰	粗	20	良	15-2	擦付不明显	
20	古跡原	17	土器	瓶	(12.0)/(5.0)/(5.0)	ナメ付・角付・テグス・擦付・テナ	明褐色・周底	褐、白・白・灰	粗・周底	30	良	15-3	西面黒色	
20	古跡原	18	土器	瓶	(7.5)/--	ナメ付・角付・テグス	褐	褐、白・白	粗	良	15-3			
20	古跡原	19	土器	瓶	(6.0)/--	ナメ付・テグス	褐・黄褐色	褐、白・白・灰	粗	良	15-2	西面黑色		
20	古跡原	20	土器	瓶	(7.4)/--	ナメ付・擦付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	良	15-3			
20	古跡原	21	土器	瓶	(7.0)/--	ナメ付・擦付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	良	15-3			
20	古跡原	22	土器	瓶	(11.0)/6.0/6.0/3.7	ナメ付・角付・テグス・ハラ削付	黄、黄褐色	褐、白・白	粗	25	良	15-2	大村産	
20	古跡原	23	土器	瓶	(12.0)/4.4/3.8	ナメ付・角付・テグス	明褐色・周底	褐、白・白	粗	良	15-4			
20	古跡原	24	土器	瓶	(12.0)/(4.4)/4.2	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	25	良	15-1		
20	古跡原	25	土器	瓶	(12.0)/(4.4)/4.5	ナメ付・角付・テグス・テナ	明褐色	褐、白・白・灰	粗	20	良	15-2		
20	古跡原	26	土器	瓶	(11.7)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	良	15-2	西面黒色		
20	古跡原	27	土器	瓶	(11.0)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	良	15-1			
20	古跡原	28	土器	瓶	(12.0)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	良	15-1			
20	古跡原	29	土器	瓶	(12.0)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	良	15-1			
20	古跡原	30	土器	瓶	(7.4)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	良	15-3	擦付		
20	古跡原	31	土器	瓶	(5.0)/--	ナメ付・角付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	良	15-3			
21	古跡原	32	土器	高台瓶	(5.0)/--	ナメ付・擦付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	良	15-3			
21	古跡原	33	土器	高台瓶	(16.7)/9.4/5.1	ナメ付・擦付・テグス	明褐色	褐、白・白	粗	20	良	15-3		
21	古跡原	34	土器	擦	(15.8)/--	ナメ付・ハラ削	米白・褐	白・白	粗	良	24-1			
21	古跡原	35	土器	擦	(17.0)/--/5.0	ナメ付・カヌキ・ハラ・ハケ付・指輪孔	米白・褐	白・白・白・白	粗	良	15-5	内外面黒面		
21	古跡原	36	土器	擦	(21.0)/--/7.5	ナメ付・カヌキ・ハラ・ハケ付	米白	白・白・白・白・小溝	粗	良	15-5	外面部黒面		
21	古跡原	37	土器	擦	(17.0)/--/7.5	ナメ付・カヌキ・ハラ・ハケ付	米白	白・白・白・白	粗	24-2	24-4-2同-3			
21	古跡原	38	土器	擦	(18.0)/--/5.0/5.0	ナメ付・カヌキ・ハラ・ハケ付	米白・黄褐色	白・白・白・白・白	粗	24-1	内面部黒面 口部黒又灰有			
21	古跡原	39	土器	擦	(31.0)/--	ハラ・ハケ付	明褐色	白・白・白	粗	24-1				
21	古跡原	40	土器	擦	(31.0)/--/5.0/5.0	ナメ付・カヌキ・ハラ・ハケ付	米白	白・白・白・白・白・小溝	粗	15-5				
21	古跡原	41	土器	擦	(29.0)/--/5.0/5.0	ナメ付・ハラ・ハケ付・木草風	米白	白・白・白	粗	24-2	24-4-1同-7			
21	古跡原	42	土器	擦	(18.0)/--	ナメ付・テグス	灰白	物・绿灰	粗	良	15-8			
21	古跡原	43	土器	擦	(17.0)/--	ナメ付・テグス	灰白	物・绿灰	粗	良	15-8			
21	古跡原	44	土器	擦	(18.0)/--	ナメ付・擦付	灰白	物・绿灰	粗	良	15-8			
21	古跡原	45	土器	擦	(16.0)/--	ナメ付・テグス	灰白	物・绿灰	粗	良	15-8			
21	古跡原	46	土器	擦	(16.0)/--	ナメ付・テグス	灰白	物・绿灰	粗	良	15-8			
22	古跡原	47	河内	擦	(7.0)/--	ナメ付・テグス	灰白	白・白	粗	24-4				
22	古跡原	48	河内	擦	(8.0)/2.0	ナメ付・テグス	灰白	白・白	粗	15-9				
22	古跡原	49	河内	擦	(7.0)/3.0/3.4	ナメ付・テグス	灰白	白・白	粗	15-9				
22	古跡原	50	河内	擦	(11.0)/--	ナメ付・テグス	灰白	白・白	粗	15-9				
22	古跡原	51	河内	擦	(10.0)/--	ナメ付・テグス	灰白	白・白・白	粗	15-7				
22	古跡原	52	河内	擦	(9.0)/--	ナメ付・テグス	灰白	白・白・白	粗	15-7				
22	古跡原	53	河内	擦	(7.0)/--	ナメ付・テグス	灰白	白・白・白	粗	15-7				
22	古跡原	54	河内	擦	(7.0)/--	ナメ付・テグス	灰白	白・白・白	粗	15-7				
22	古跡原	55	河内	擦	(7.0)/--	ナメ付・テグス	灰白	白・白・白	粗	15-7				
22	古跡原	56	河内	擦	(7.0)/--	ナメ付・テグス	灰白	白・白・白	粗	15-7				
22	古跡原	57	河内	擦	(7.0)/--	ナメ付・テグス	灰白	白・白・白	粗	24-4				

表8 野沢コレクション 石器観察表

団旗	地 点	掲載 No.	分 類	長/幅/厚(cm)	重さ(g)	石 材	色 調	注 記	備 考
22	江曾原	59	砾石	(4.8)/4.3/2.05	81.7	砂岩	灰黄・灰オリーブ	15-13	
22	江曾原	60	砾石	(6.8)/4.3/2.55	91.8	砾灰岩	灰黄・暗灰黄	15-13	
22	江曾原	61	砾石	3.95/3.5/3.35	70.4	砾灰岩	灰黄・暗灰黄	15-13	

表9 野沢コレクション 土製品観察表

団旗	地 点	掲載 No.	種 別	時 期	長/短/厚cm 口/底/高cm	重さg	整形技法等	色 調 内/外	胎土	残存率 %	地成	注 記	備 考
22	江曾原	58	土製品		(4.6)/(6.9)/1.4	81.74	ナデ	明褐色/明赤褐色 褐、白・黒・小羅多		24-3	良		

第4章 総 括

江曾原遺跡は、昭和25・26年に当時山梨大学芸術部加納岩分校に勤務していた野沢昌康氏が教え子や地元教師、青年団、八幡中学校生徒らの協力のもと、情熱を傾注して調査された学史的な遺跡である。堅穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸、溝などがコンパクトにまとまって存在し、しかも土壤が粘土質であったことから穀類をはじめとする植物遺存体が良好に保存されていたため、古代食生活、農業生産の実態を示す好例として、その後高く評価された。

今回、偶然にもその調査地点を通過する農道が建設されることとなり、発掘調査を実施することとなった。覆土を剥いだところ、かつての遺構は丁寧に埋め戻されていて、60年以上前と同じ姿で再び私達の目前によみがえつたのである。各遺構は當時、徹底的に発掘されていたため、旧調査地点ではとくに新たな発見はなく、期待された各遺構の時期の検証、植物遺体の検出状況に関する情報を見出すことはできなかったが、当時の発掘調査における発掘調査の正確さ、遺構検出の確からしさを確認でき、現在と全く変わらない遺構の掘削状況であることに感心した次第である。まだ発掘調査が一般的でなく、とくに山梨県内では遺構を丁寧に掘り起こす発掘調査が始められた初期の段階にあって暗中模索状態であった当時、調査担当の野沢昌康氏がどこで、どのようにして発掘技術を習得したのだろうかと大いに関心をそそられた。野沢氏は昭和22年8月の登呂遺跡の発掘に参加しているので、その際に発掘技術を習得したと思われる。整理の過程で、野沢氏の江曾原遺跡に関する資料が山梨県立考古博物館に収蔵されていることを知り、見せていただいたところ、出土した遺物とともに当時の記録類が一括して保存されていることがわかった。当時の写真ネガ、プリントや、調査状況を克明に記した野帳などは、考古学史的にも、また江曾原遺跡を知る第一級の資料といえる。

ただ土器類は出土した遺構別に保存されておらず、遺跡一括資料としてまとめられているため、3軒の堅穴住居跡や大溝、掘立柱建物跡、井戸の時期を検証することができないのは大変残念であったが、それでも野帳等の記載を参考にしながら、発掘の調査過程、出土状況をうかがうことが可能となった。

昭和27年の江曾原遺跡の報告で、昭和24年調査の日下部遺跡と比較したうえで野沢氏が江曾原遺跡の調査成果の要点は以下のとおりである（原文のまま）。

- (1) 水田地域にあり発掘面積は狭い。
- (2) 頗る複雑であり時間的にも長く居住していた—井戸、水道、倉庫址、遺物
- (3) 粘土質土壤のため遺構がはっきりしている。
- (4) 遺物少し、殊に鉄器僅少。
- (5) 有機物の遺物多く且、多種な事は顕著な特色である。
- (6) 黒書土器はあるが少量である。
- (7) 土器の形式からみて、やや下る時代のものまである。
- (8) 火災のための転住ではなく計画的転住らしい。
- (9) 住居址は両遺跡何れも小さくて柱穴が殆どみられぬ点、石置屋根のみられる点などは同一である。野沢氏の指摘を整理すると以下のようにまとめられる。すなわち、広い面積の中で堅穴住居を点として調査した日下部遺跡に対し、江曾原遺跡では調査区は狭い面積ではあったが、粘土質土壤のおかげで遺構が明晰に検出でき、各種遺構からなる集落構成の一端が明らかにされ、柱痕や植物遺体などの有機物が検出できた。ただ日下部遺跡と較べると全体的に遺物が少なく、中でも黒書土器、鉄製品が僅少であるが、高台付きの土器や灰釉陶器の存在から時代的にはやや下るものがあり、継続時期に違いがある。住居内での完形土器の遺存例が少ないことから、集落廃絶の要因として移住による転出が考えられ、条里施行に伴う移転の可能性

を推測する。堅穴住居は小形で柱穴がない構造であり、覆土中出土の礫の存在から、屋根に石を置いた石置き屋根ではなかったか。

結語として野沢氏は「江曾原遺跡は奈良時代から平安時代にかけて数十年乃至百年わたる農耕集落のあとで南半の柱穴群が倉庫又は住居の何れを示すものとしても、そこにはとに角大きな家屋が建てられて居り、且、水道の施設までついている相当の郷戸主が居住していたものと思われる」とまとめている。大形掘立柱建物跡、井戸、送水管の存在から一般集落を越えた集落の質の違いを見出しており、今日的な視点でもきわめて正しい評価であったといえる。

野沢氏が江曾原遺跡の調査のなかで大いに関心をもって調査にあたったのが、溝中に検出された送水管(粘土管)である。報告には写真も掲載されているが、遺構の構造や検出状況はわかりにくい。報告によれば送水管は2箇所にあり、ひとつは2箇所の湧水から派生する大溝の中に、両側に石を並べ、板材で覆って粘土を貼った粘土管があった。さらに井戸から大溝に導く溝中には4枚の板で四角く囲んだ管の周りに幅13cm、長さ30cm、厚さ2cmの粘土板で側面、上面を覆った粘土管があったとされ、水量の変化に伴って送水管を設置し、暗渠として埋設したのではないかとみている。この点について、野沢氏の野帳や実測図によると、溝中の底から浮いた位置に断面が四角い粘土による管があり、その内側が薄い板からなる構造であることがわかる。

今回の調査では、この遺構の続きが調査区東側の土手中に遺存していることを期待したのであるが、送水管を見出すことはできなかった。今日に至るまで、各地で平安時代集落が調査されているが、送水管に関する類例はほとんどない。可能性としては暗渠排水施設の一種ではないか、とも考えられ、遺跡一帯が水田化された平安時代以降の構造物の可能性がある。ただ、野沢報告によれば溝、大溝とともに覆土中から多量の土師器類が出土したことであり、その点が疑いなものであれば平安時代の所産となり、溝出土とされる植物遺体も同時期のものである。しかし野沢氏も報告中で指摘するように、大溝(5号溝)に取り付けられた溝(今回の調査では11号溝)が旧1号住(4堅)の隅をかすめ、旧2号堅穴、旧1号掘立(2号掘立)を切るようにして存在することから、それらの時期よりは新しいとみるべきである。

今回の調査では、野沢氏調査地点の北側に3軒、南側に4軒の計7軒の堅穴が新たに検出された。集落の

広がりを推測するならば、野沢氏調査地点を中心として南北70mの範囲に居住域を想定できる。出土した土師器の様相からすれば、底径がやや大きく、内面に暗文をもつ3号堅穴段階、口縁部がやや丸く玉緑化を始める8号堅穴段階、玉緑化した6号堅穴段階がある。これを甲斐型土器編年に当てはめると、3号堅穴段階が山梨県史編年Ⅳ期(宮ノ前編年V期、9世紀第1四半期を中心とした9世紀前半)、8号段階が山梨県史Ⅴ期(宮ノ前Ⅵ期、9世紀第4四半期~10世紀前半)、6号段階が山梨県史Ⅶ期(宮ノ前Ⅸ期、10世紀前半~後半)となる。

野沢コレクションの江曾原遺跡資料は図20~22のようないくつかの土師器皿類、須恵器類、灰陶器皿類等である。図示した以外に八幡小学校に土師器小形壺1点、ほぼ完形の壺皿4点、須恵器長頸壺1点等がある。土師器類は4号堅穴、大溝からの出土品が大半であろうとみられるが、時期的には今回の資料を遡る山梨県史Ⅲ期(8世紀後半)の資料があるなど、江曾原集落の時期的な消長をうかがうことができる内容といえる。

全体的にみて土師器の様相から指摘できるのは、高台付皿に独自性をもつものがあること、胎土にやや粗い砂粒が多く含むものがあること、北巨摩地域に見る黒色土器がないこと、甲斐型の内黒土器に放射状とともに花弁状をなす暗文が比較的多く存在することなどである。山梨市域を含む東山梨郡域、とりわけ笛吹川右岸地域の平安時代の土師器の様相として、今後周辺地域の土師器を含めて検討していかたい。

もう1点、野沢氏が江曾原遺跡の調査で関心を寄せたのは八幡条里的成立期である。氏は報告の中で江曾原遺跡周辺の条里型地割について次のように記している。

「大工部落以東の楔形をなした地帯は3000分の1国、並びに分間園によって溝渠と畦畔の位置を計測してみると、八幡小学校前から八幡中学校前に至る道路を東西の軸として一町間に北に4本、南に2本、東西に平行に走る道路が残って居り、さらに一町ごとに南北の畦畔が走っていて、条里制が施行されていた事は明白である。」

江曾原遺跡のある八反田は地名からして条里制を想はせるものだが遺跡の北、東の小道と小川は正に輪線から一町南の溝渠と畦畔に当たっている。」

氏は、遺跡が東・北の溝渠、畦畔によって不自然に切断されていることから、周辺の条里制施行期がこの遺跡の後、つまり平安時代以降の施行と推測した。

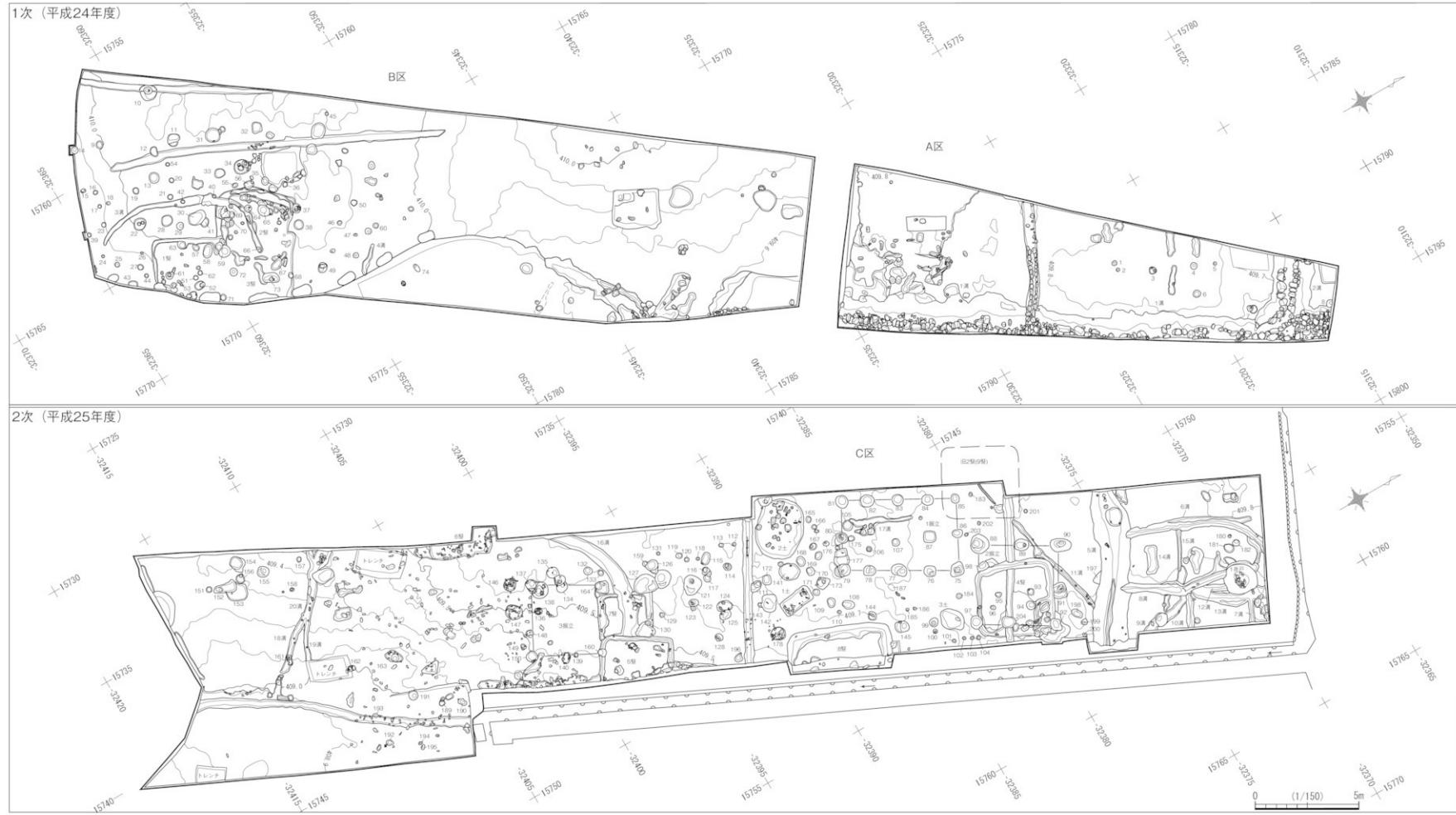
現在みる表層条里が施行当初の姿を留めていると考

えることはできず、初期施工後に改変を経た姿であることはいうまでもないが、少なくとも江曾原遺跡付近に存在する表層条里は、今回調査の A 区で道に沿うようにして古い区画となる石列を伴う溝が確認されたことから、多少のブレはあっても大きく違うものではないことがわかる。したがってこの一帯では、現状の表層条里が当初の姿と大きく異なるものではないと仮定し、C 区 4 号竪穴、8 号竪穴が現状の畦畔と重複する点から、条里地割の成立が平安時代の集落よりも後出的であるとみた野沢氏の指摘は卓見といえよう。

最後に、この調査、報告書刊行にご理解、ご協力を賜った山梨県岐東農務事務所、山梨市教育委員会をはじめ、関係諸機関、調査、整理参加者の方々には心より感謝申し上げます。

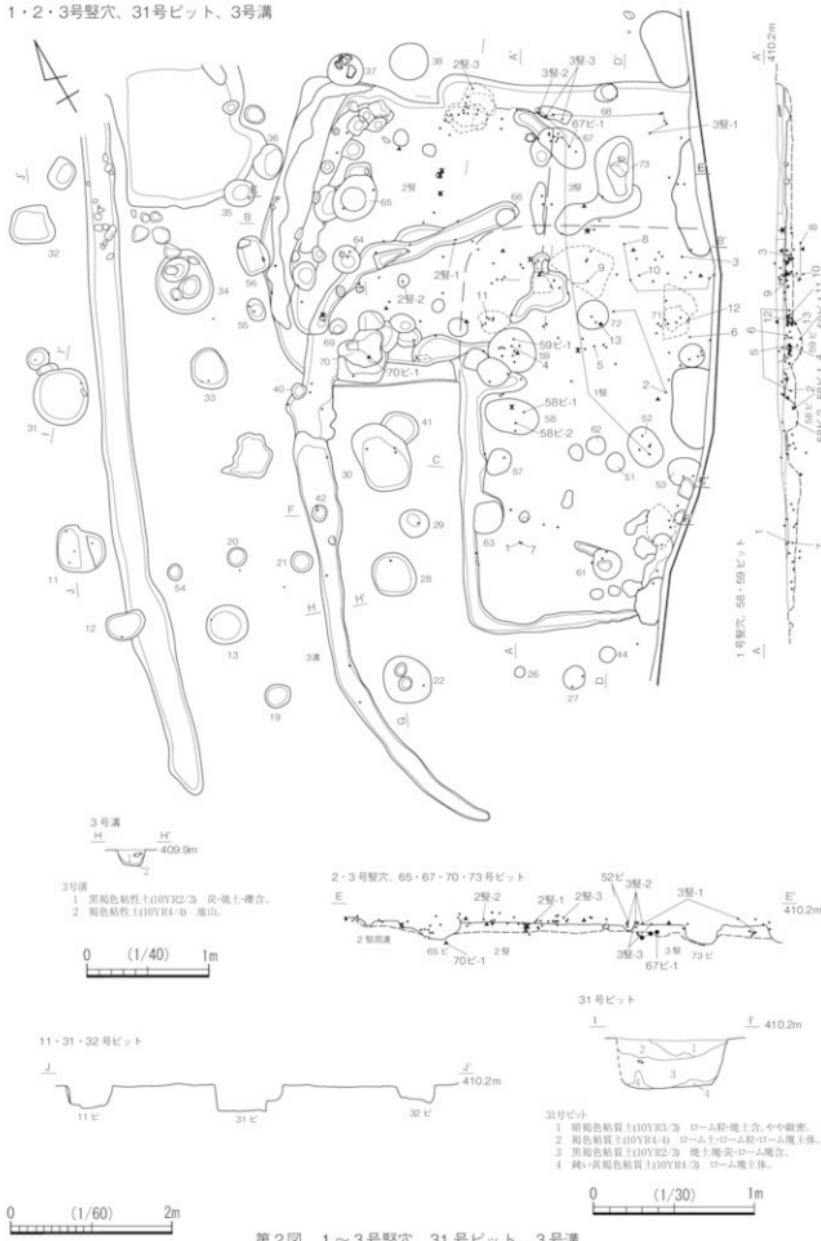
【引用参考文献】

- 柳原功一 1992 「宮ノ前遺跡における奈良・平安時代の土器・陶器」『宮ノ前遺跡』
直眞信夫 1956 『日本古代農業発達史』
野沢昌康 1952 「八幡村江曾原遺跡の研究」『山梨県高等教育会研究報告』第 1 号
平野修 2012 「江曾原遺跡出土資料」『山梨県考古学協会誌』第 21 号
山下孝司・瀬田正明 1999 「奈良・平安時代の編年」『山梨県史 資料編 2 原始・古代 2』
山梨市教育委員会 1987 『日下部 日下部遺跡調査報告書』



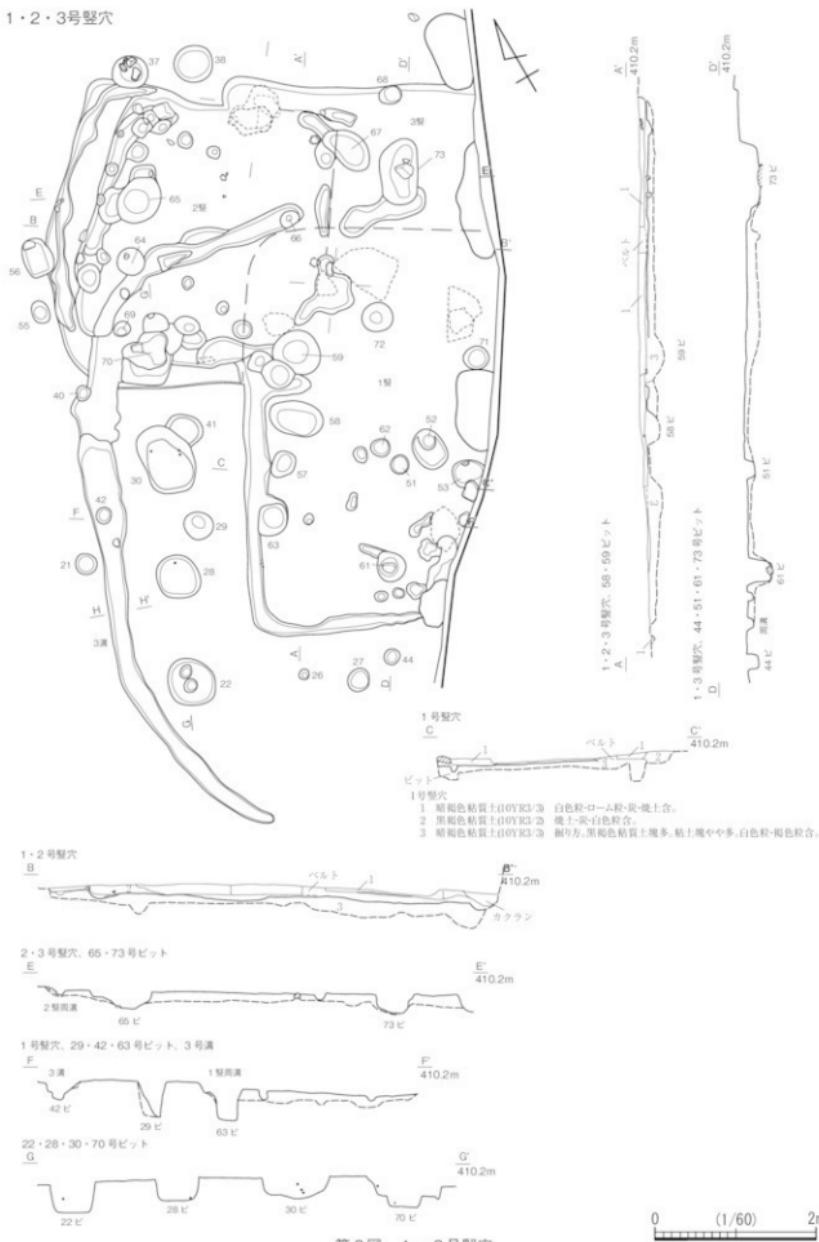
第1図 調査区全体図

1・2・3号竪穴、31号ピット、3号溝

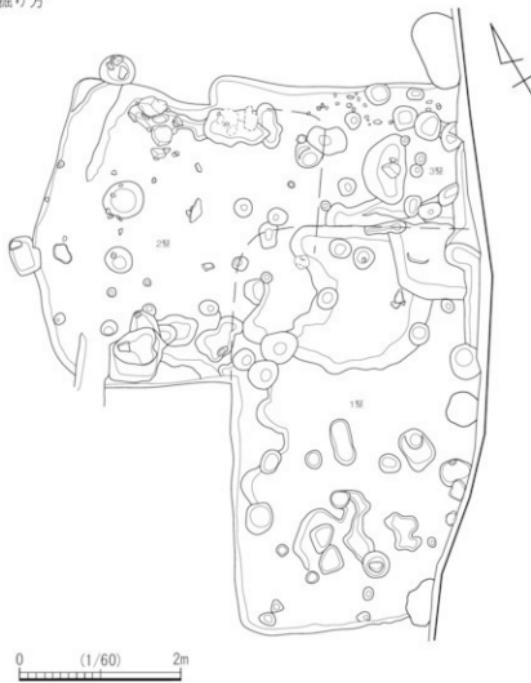


第2図 1～3号竪穴、31号ピット、3号溝

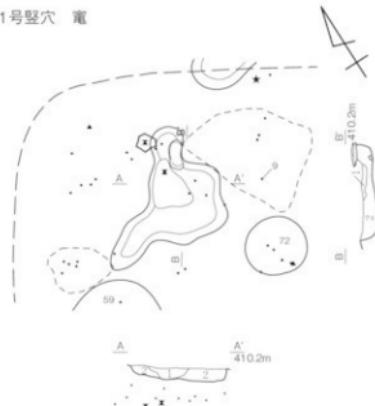
1・2・3号堅穴



1・2・3号竪穴 掘り方



1号竪穴 竪

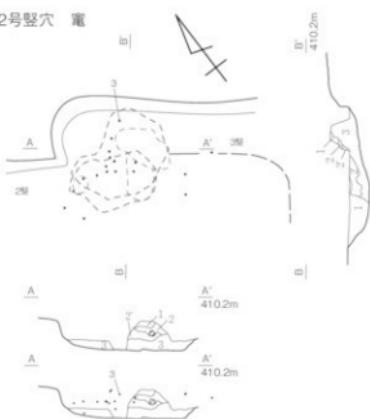


1号竪穴 竪

- 1 深土: 25YR4/8
- 2 黒褐色粘質土: 10YR2/3 白色粒・黄色粒・小理含。

0 (1/30) 1m

2号竪穴 竪

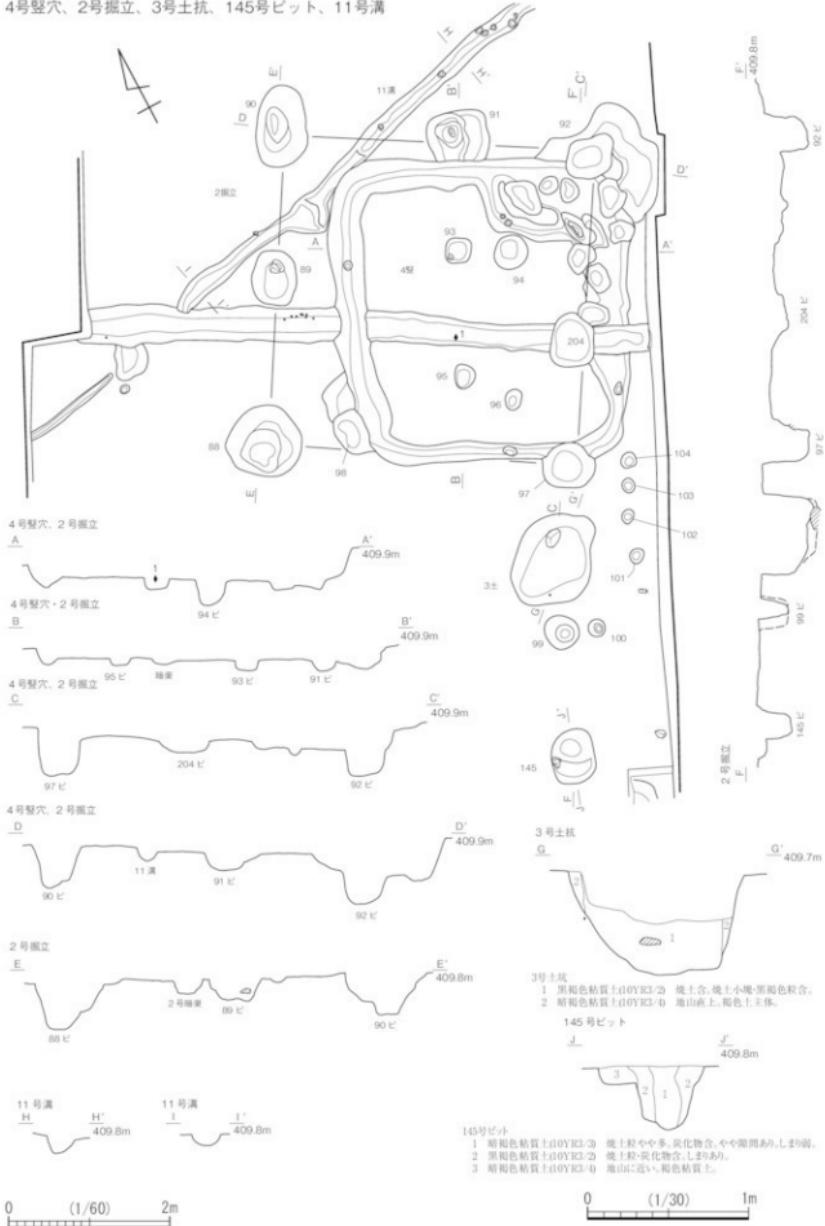


2号竪穴 竪

- 1 黒褐色粘質土: 10YR3/2 深土・灰含。
- 2 黄褐色粘質土: 25YR3/4
- 3 紅褐色: 10YR4/6 深土・灰含。理含。オレンジ色。
- 4 黑褐色粘質土: 10YR3/2 武灰・白色粘含。

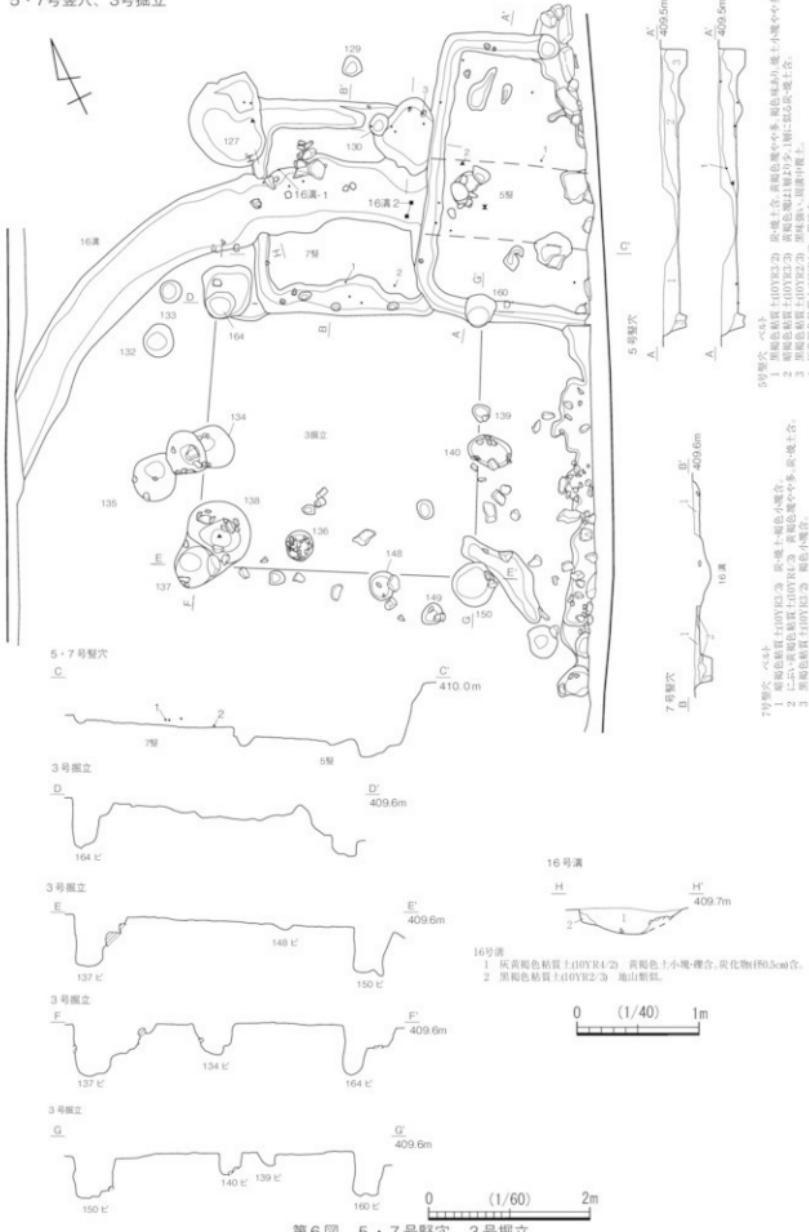
第4図 1～3号竪穴掘り方、竪

4号豊穴、2号掘立、3号土坑、145号ピット、11号溝



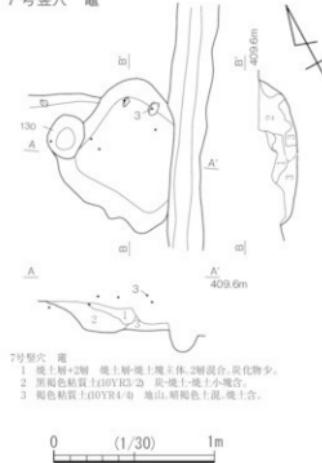
第5図 4号豊穴、2号掘立、3号土坑、145号ピット、11号溝

5・7号竪穴、3号掘立

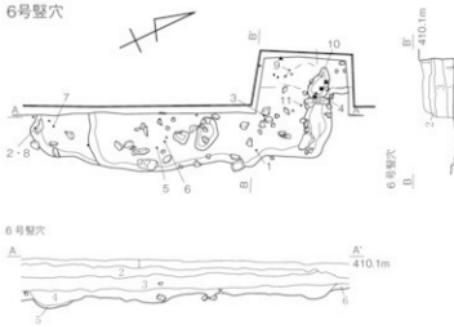


第6図 5・7号竪穴、3号掘立

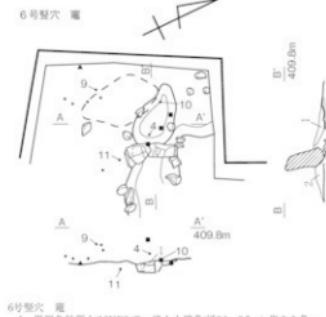
7号豎穴 窟



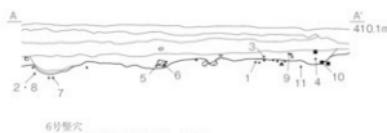
6号豎穴



6号豎穴 窟

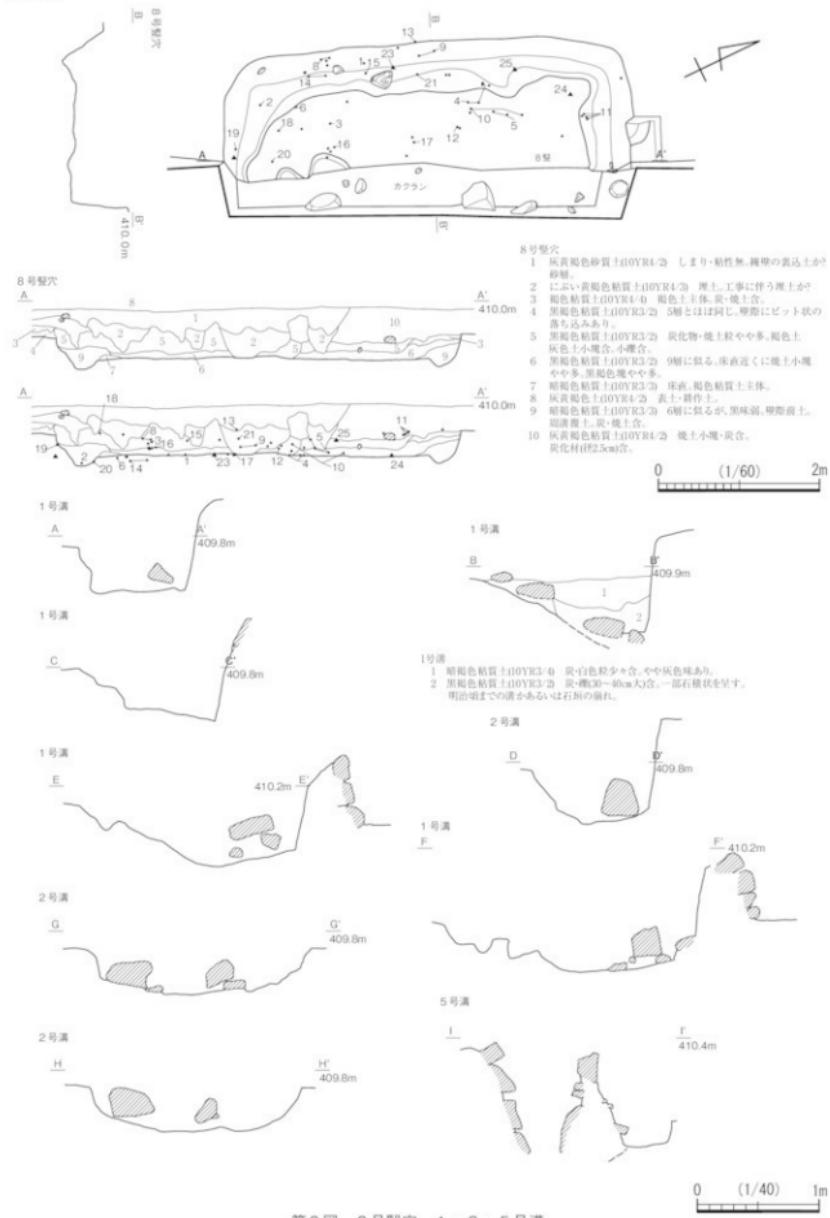


6号豎穴



第7図 7号豎穴窟、6号豎穴

8号豎穴



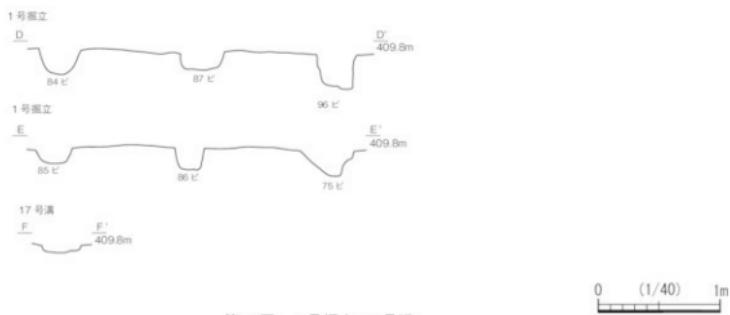
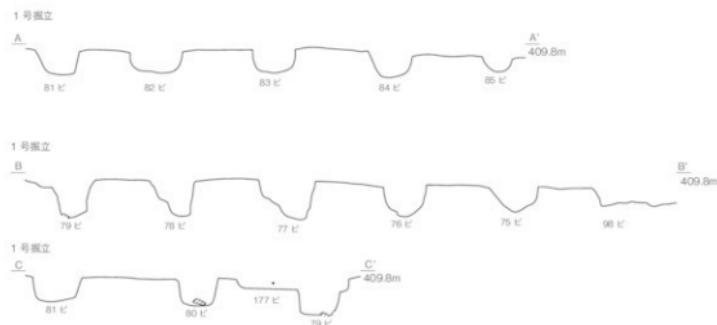
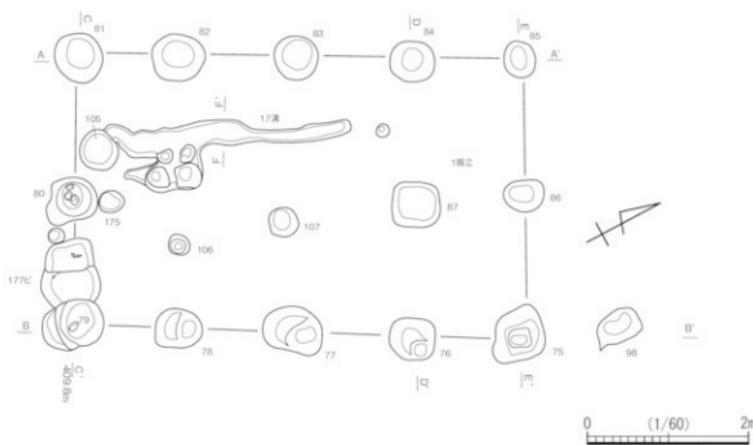
第8図 8号竪穴、1・2・5号溝

1・2・5号溝



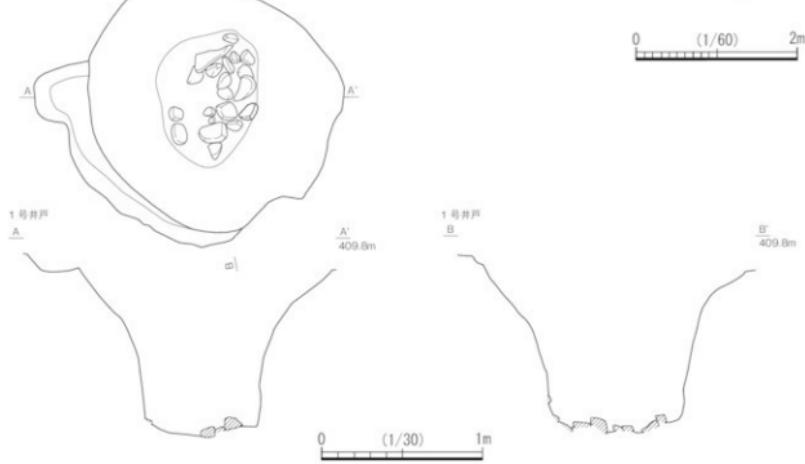
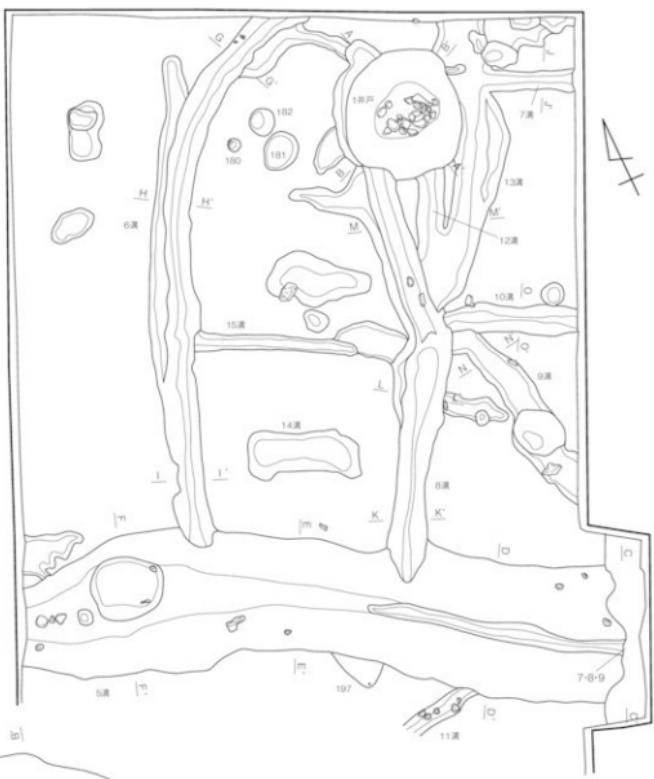
第9図 1・2・5号溝

1号掘立・17号溝

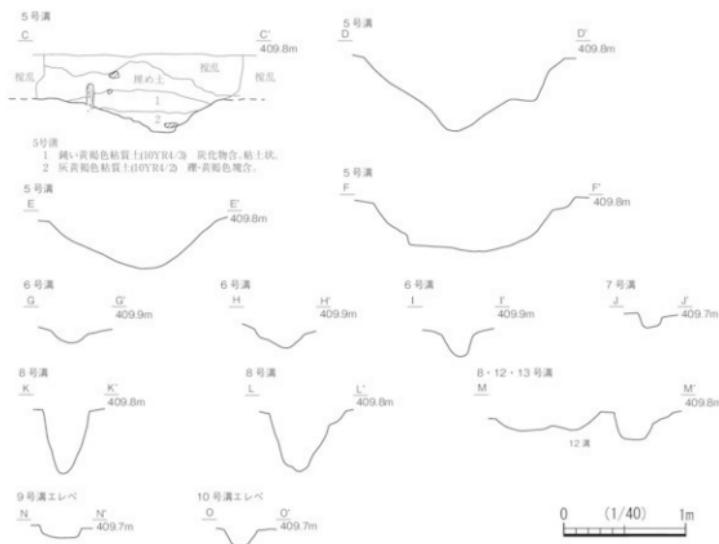


第10図 1号掘立、17号溝

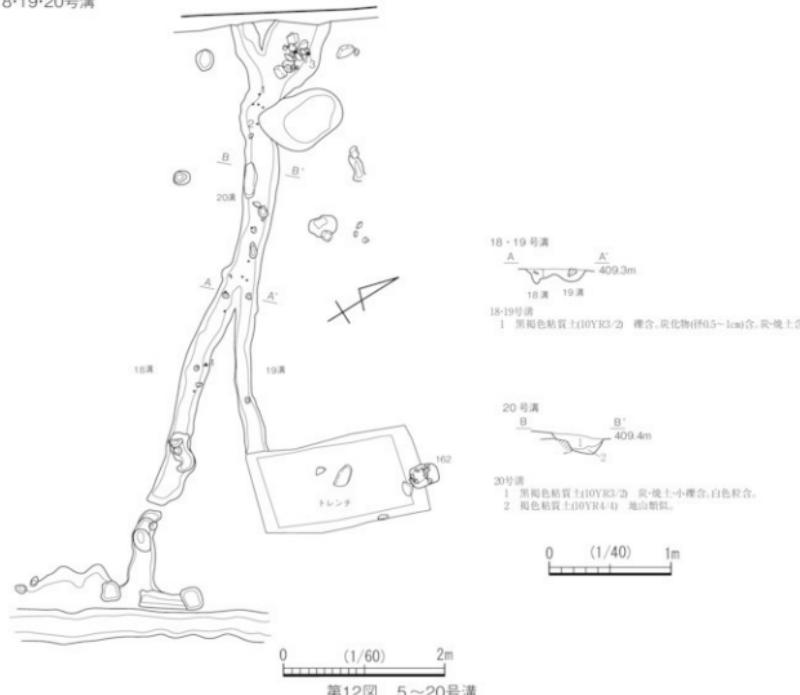
1号井戸、5~15号溝



第11図 1号井戸、5~15号溝

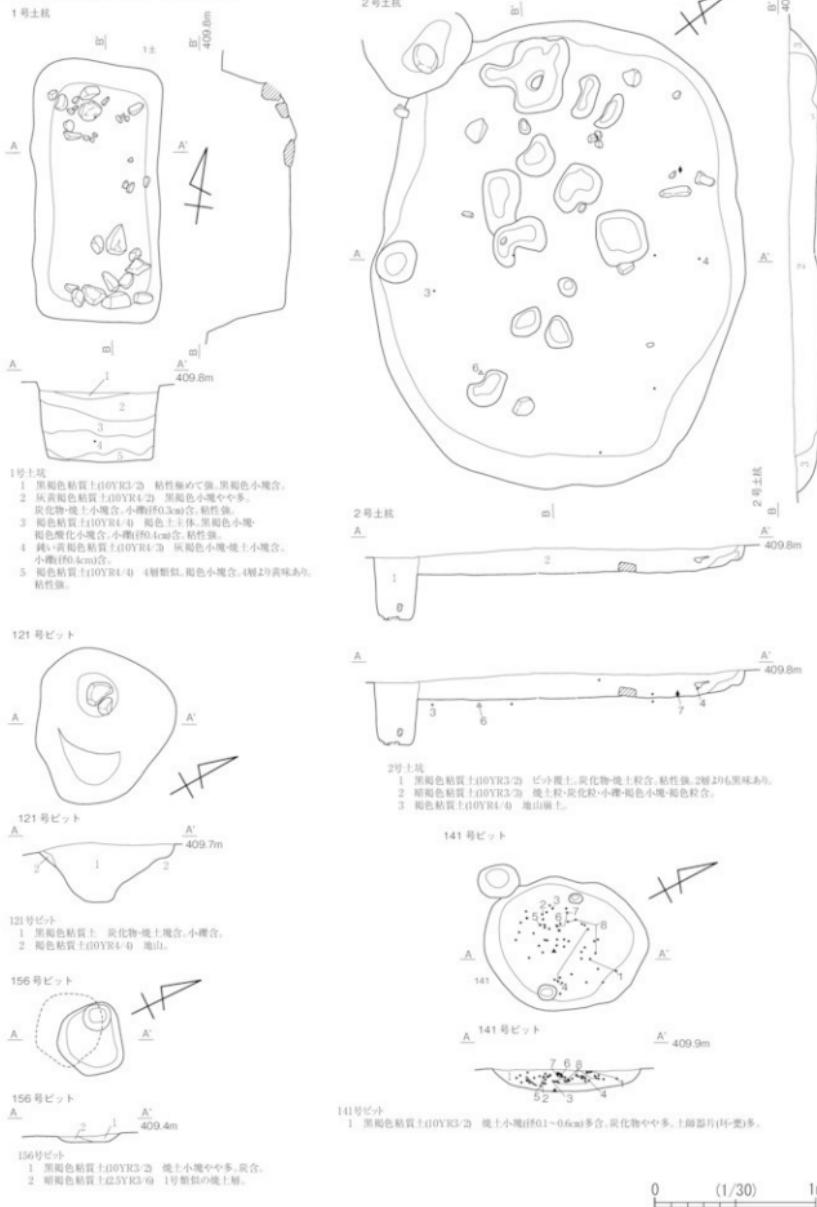


18・19・20号溝



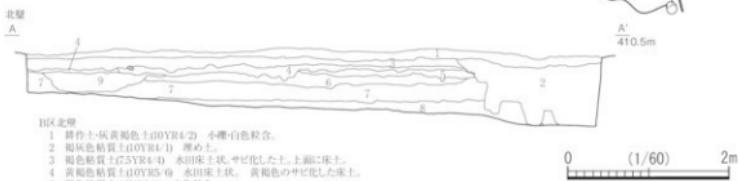
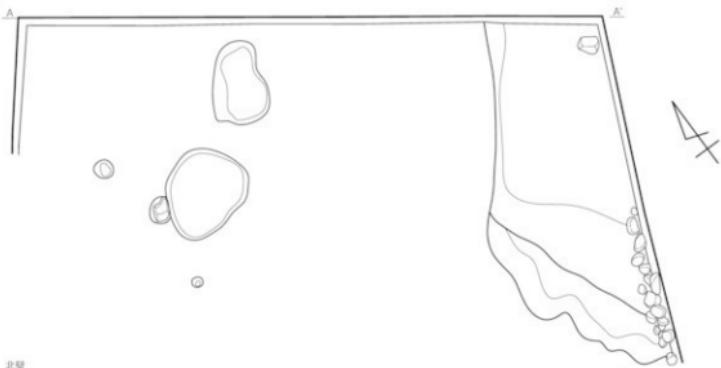
第12図 5～20号溝

1・2号土坑、121・141・156号ピット

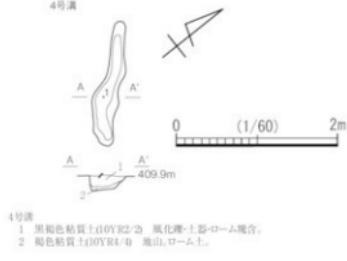


第13図 1・2号土坑、121・141・156号ピット

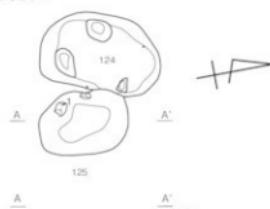
B区北壁



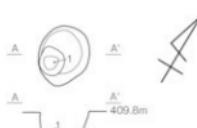
4号溝



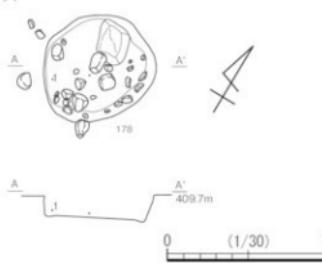
125号ピット



168号ピット

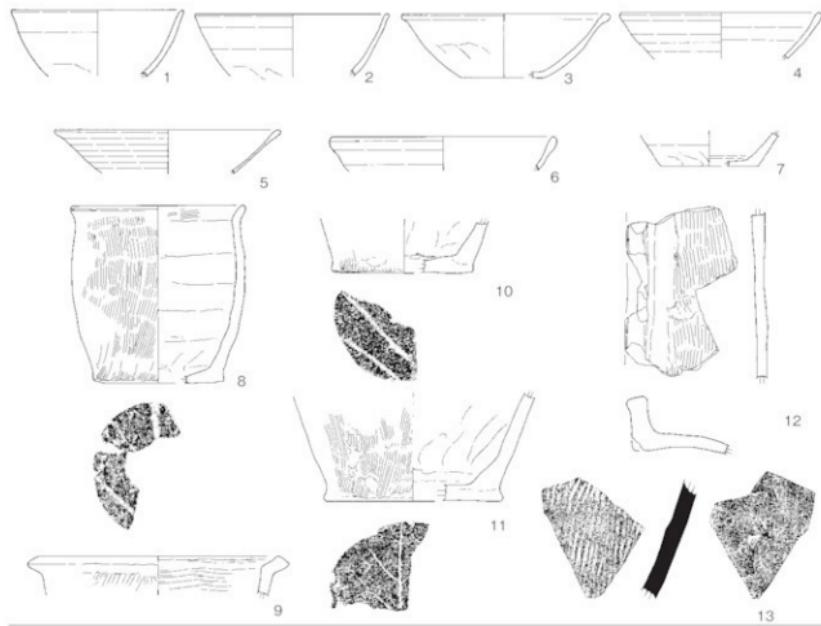


178号ピット



第14図 B区東壁、125・168・178号ピット、4号溝

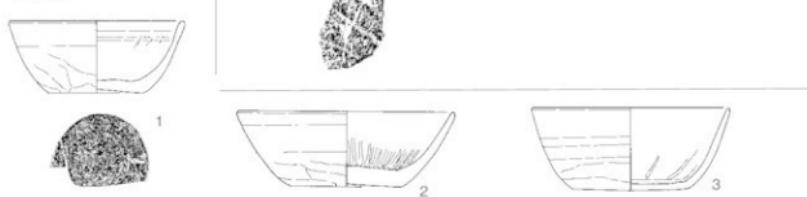
1号竪穴



2号竪穴



3号竪穴



4号竪穴

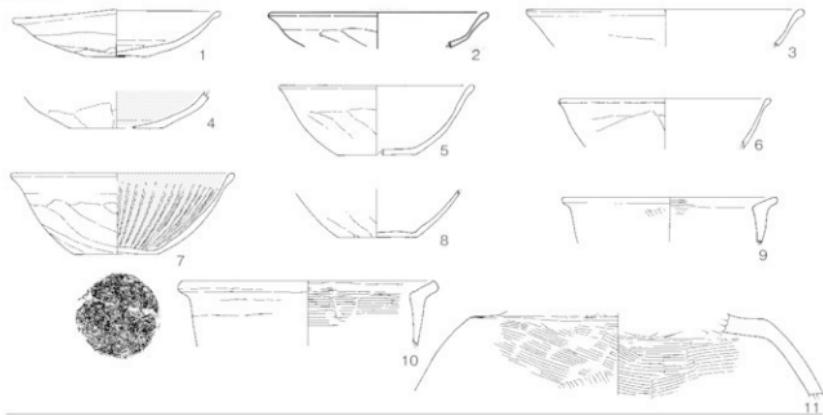


5号竪穴



第15図 出土遺物 (1)

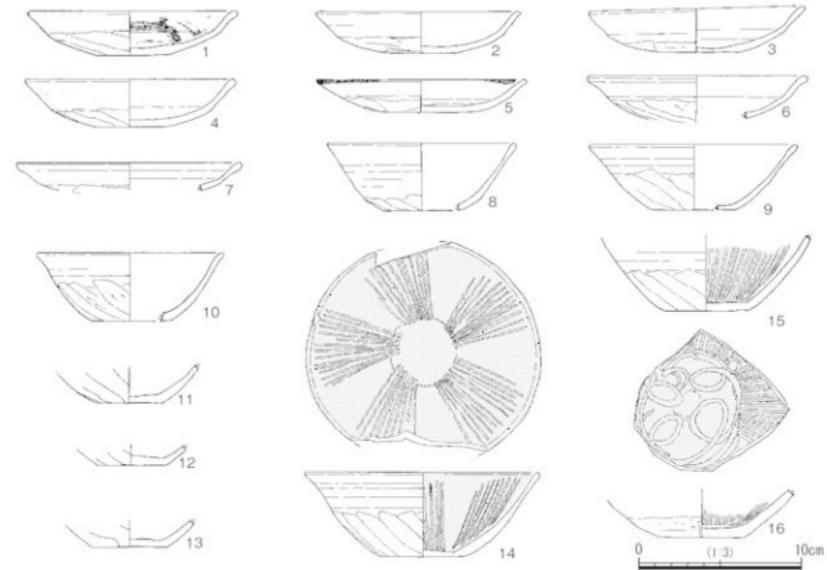
6号竪穴



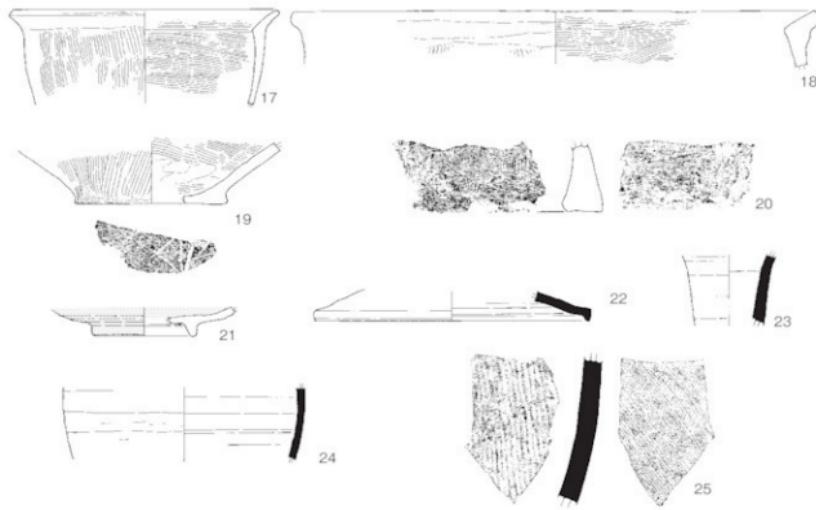
7号竪穴



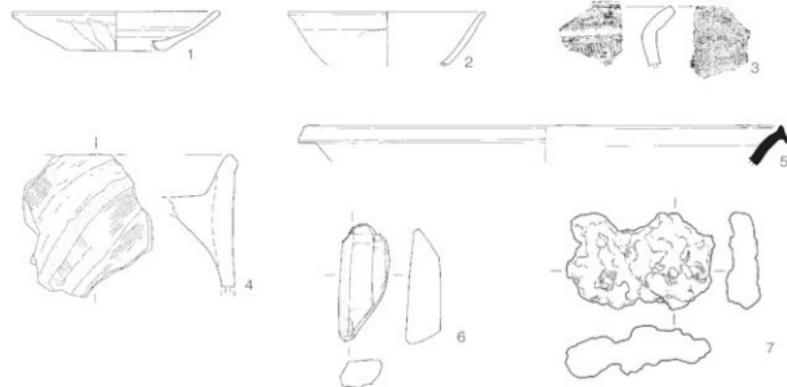
B号竪穴



第16図 出土遺物 (2)



2号土坑



58号ピット



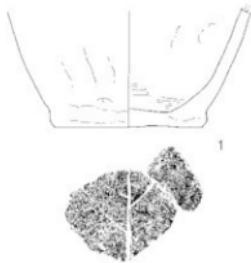
59号ピット



0 (1:2) 5cm 0 (1:3) 10cm
(2±6・7)

第17図 出土遺物 (3)

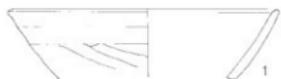
67号ピット



70号ピット



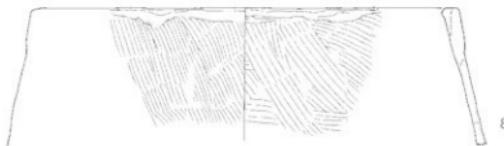
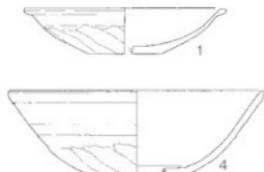
86号ピット



125号ピット



141号ピット



152号ピット



168号ピット



178号ピット



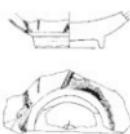
0 (1.3) 10cm

第18図 出土遺物 (4)

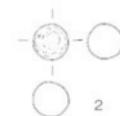
1号溝



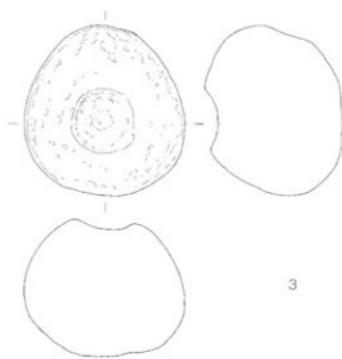
2号溝



1



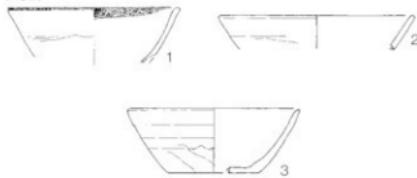
2



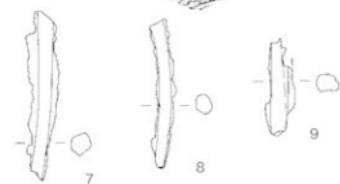
4号溝



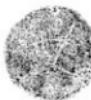
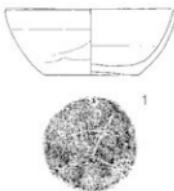
5号溝



6



16号溝



2

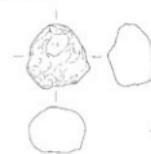
18号溝



20号溝



遺構外



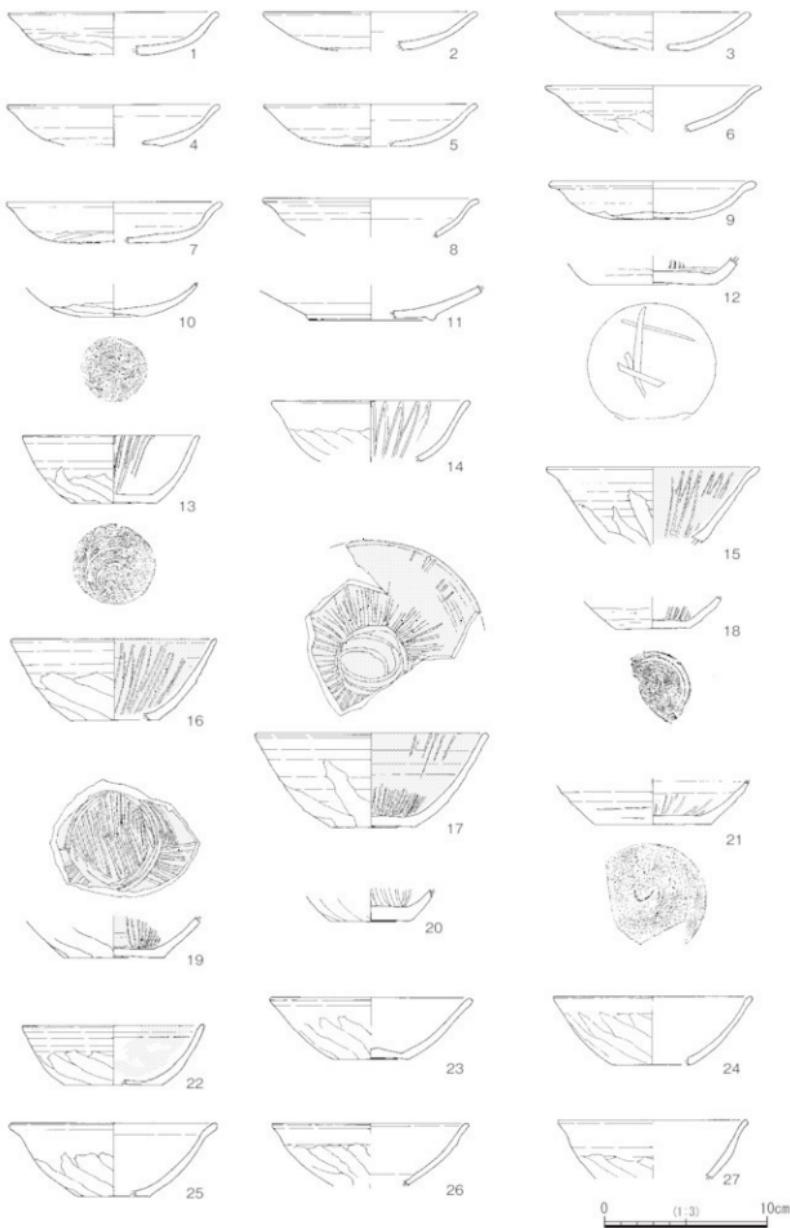
表様



擾乱



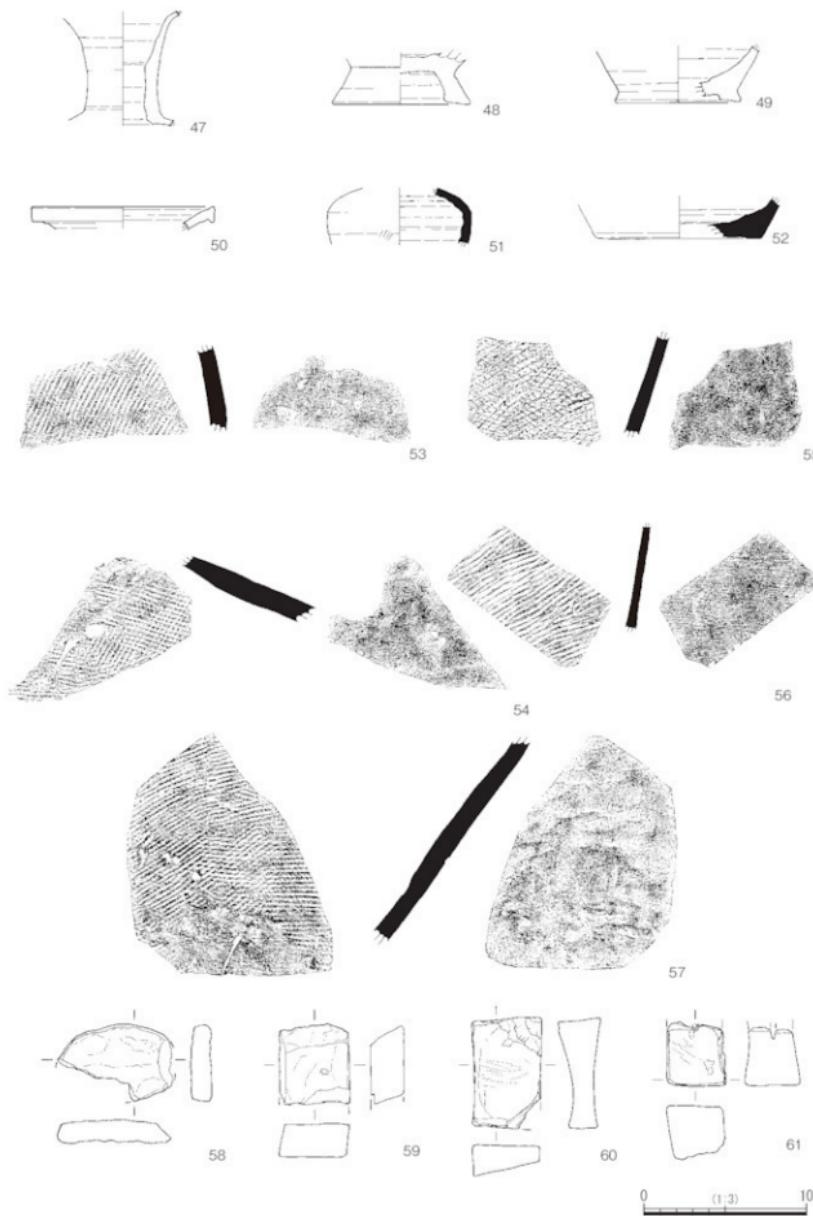
第19図 出土遺物 (5)



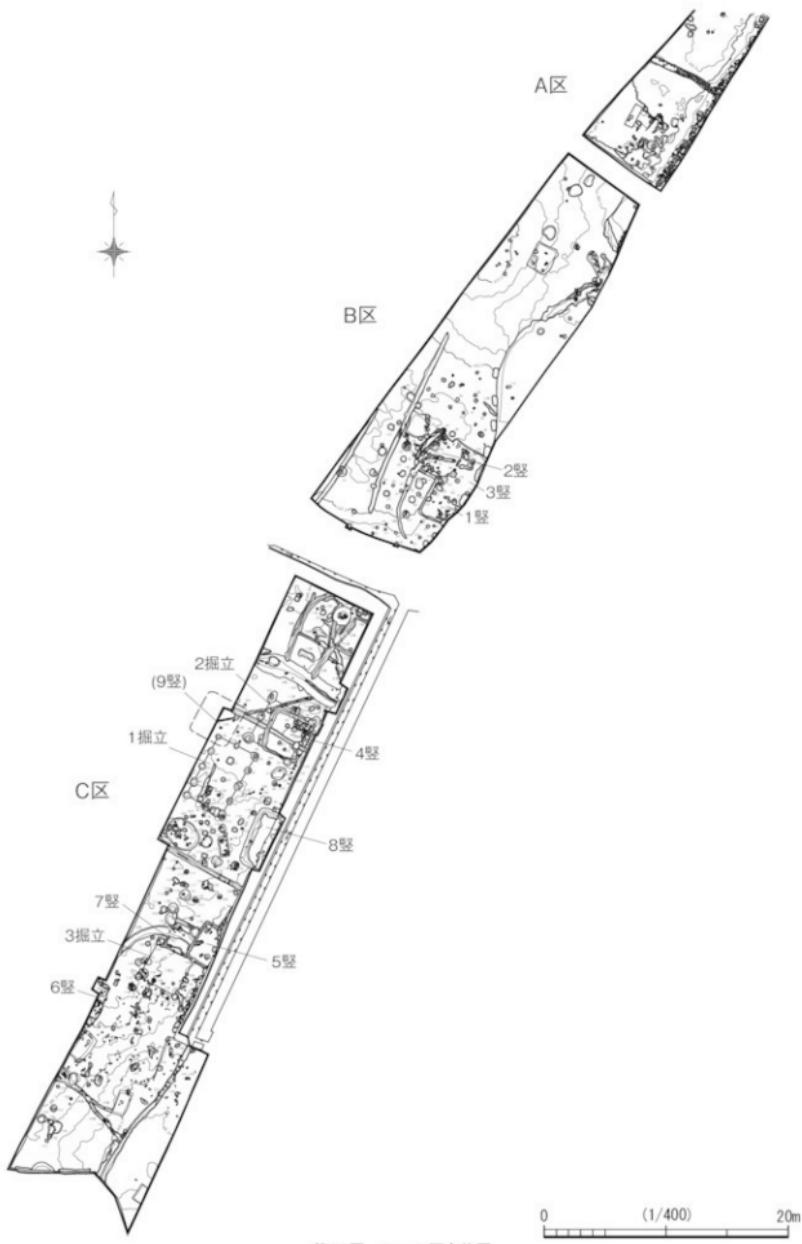
第20図 昭和25・26年出土遺物（1）



第21図 昭和25・26年出土遺物（2）



第22図 昭和25・26年出土遺物（3）



第23図 B・C区全体図



1 第1・2次調査全景合成写真(上から)



2 第1次調査俯瞰写真



3 第1次調査区俯瞰写真



4 第1次調査区俯瞰写真



5 第1次調査区俯瞰合成写真(上から)

図版 2



6 第2次調査区合成俯瞰写真(上から)



7 第2次調査区俯瞰写真



8 第2次調査区俯瞰写真



9 第2次調査区部分俯瞰写真



10 第2次調査区俯瞰写真



11 第1次A区調査前の状況



12 第1次B区調査前の状況



13 第2次調査C区調査前の状況



14 2号溝上層礫出土状況



15 1号溝礫出土状況



16 A区1号溝ほか



17 1号溝上層の礫を除去した状況



18 1号溝上層の礫を除去した状況

図版 4



19 2号溝上層の礫を除去した状況



20 A区作業風景



21 A区完掘状況



22 1~3号竪穴遺物出土状況



23 1号竪穴付近遺物出土状況



24 3号竪穴遺物出土状況



25 1~3号竪穴・溝等完掘状況



26 1~3号竪穴完掘状況



27 1号竪穴完掘状況

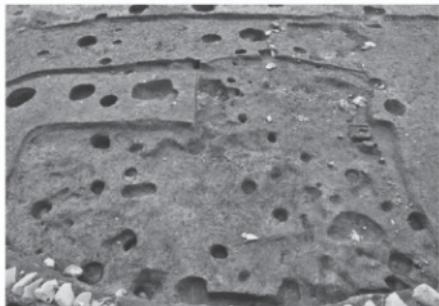


28 柱穴列完掘状況

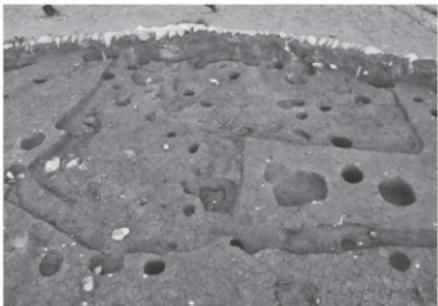
図版 6



29 1～3号竪穴完掘状況



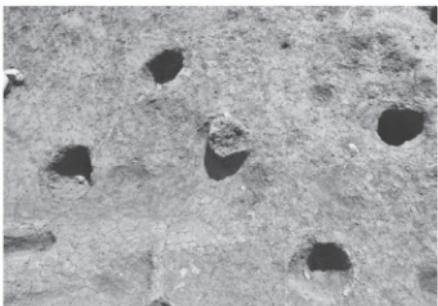
30 1～3号竪穴掘り方完掘状況



31 1～3号竪穴掘り方完掘状況



32 2号竪穴



33 2号竪穴



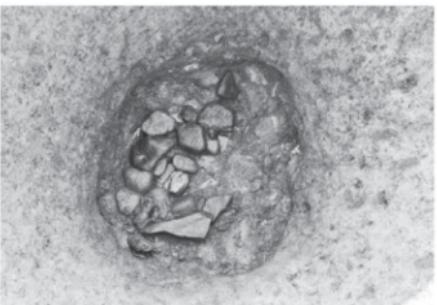
34 1号井戸周辺調査風景



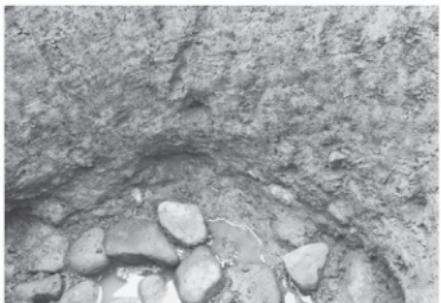
35 4号竪穴付近調査風景



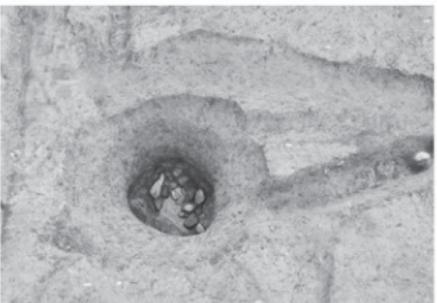
36 1号井戸完掘状況



37 1号井戸内 sondage 状況



38 1号井戸内壁の状況



39 1号井戸と周辺の溝完掘状況



40 1号井戸周辺溝完掘状況



41 5号(大溝)付近完掘状況

図版 8



42 5号溝(大溝)断面



43 5号溝に残る杭



44 5号溝(大溝)完掘状況



45 4号竪穴内暗渠棟出状況



46 4号竪穴完掘状況



47 4号竪穴・2号掘立完掘状況



48 1号掘立完掘状況



49 1号掘立完掘状況



50 1号掘立・17号溝完掘状況



51 1号掘立付近調査風景



52 8号竖穴遺物出土状況



53 8号竖穴遺物出土状況



54 8号竖穴遺物出土状況

図版 10



55 8号竪穴完掘状況



56 2号土坑周辺



57 5・7号竪穴完掘状況



58 5・7号竪穴完掘状況



59 第2次調査区調査風景



60 6号溝完掘状況



61 6号竪穴遺物出土状況



62 6号竪穴完掘状況



63 6号竖穴墓内出土状况



64 6号竖穴墓内完掘状况



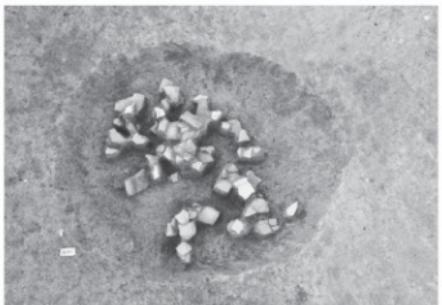
65 6号竖穴墓内出土状况



66 6号竖穴墓内出土状况



67 18~20号溝付近完掘状況



68 141号ピット遺物出土状況

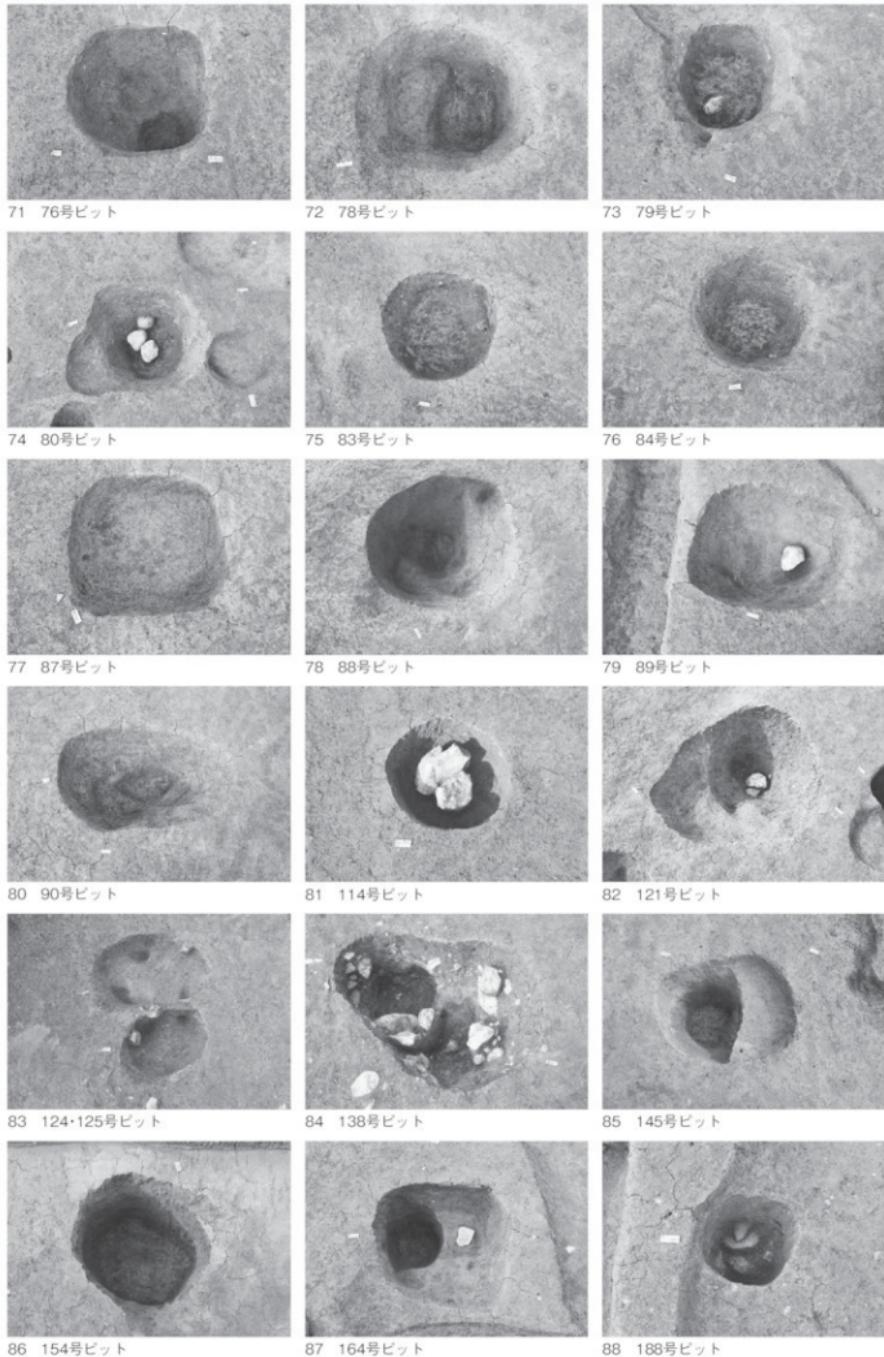


69 1号土坑完掘状況



70 20号溝遺物出土状況

図版 12





89 B区調査風景



90 A区調査風景



91 見学会風景



92 見学会風景



93 見学会時に公開された植物遺存体資料



94 見学会時に公開された炭化物・歯等

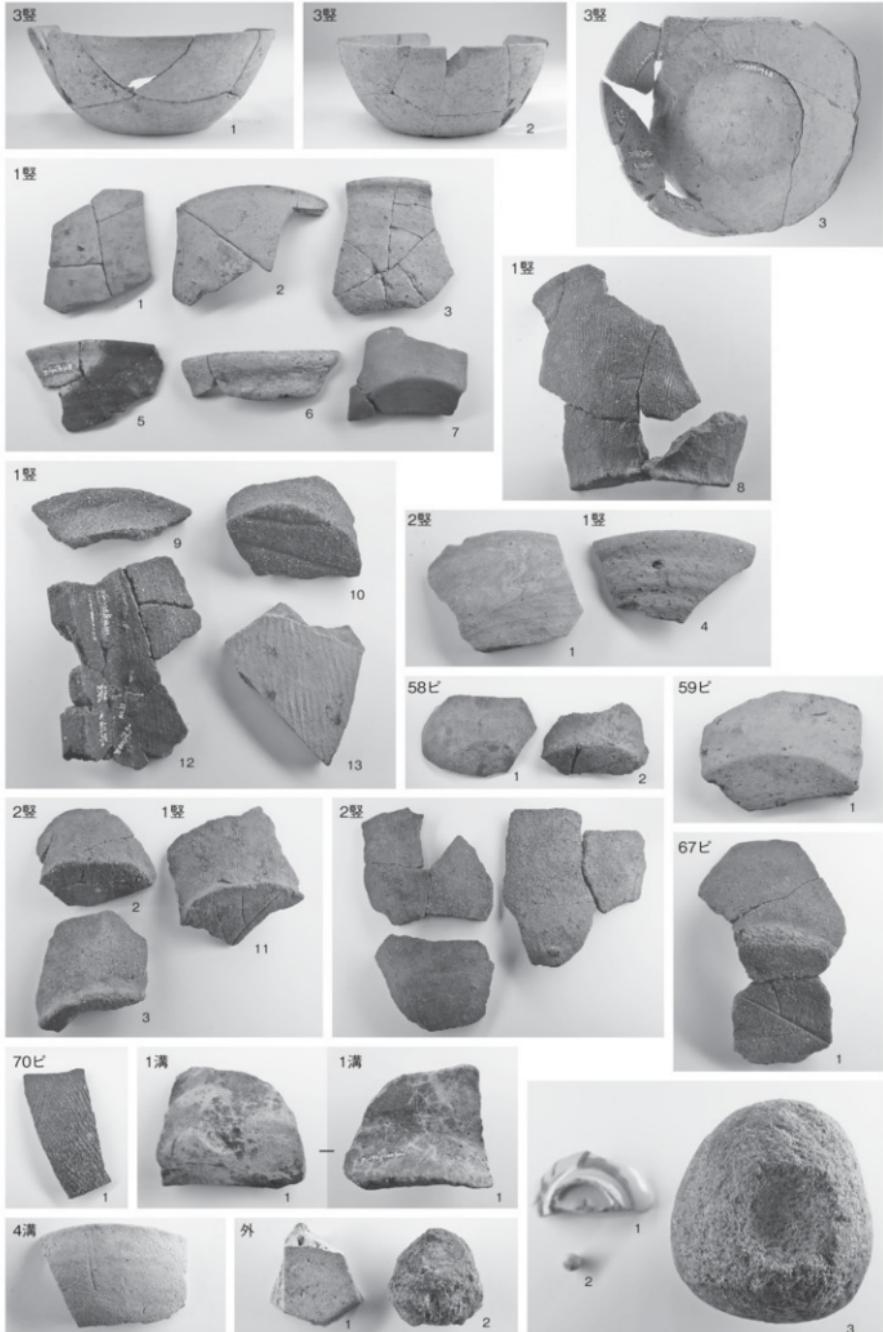


95 資料室展示の江曾原遺跡出土資料

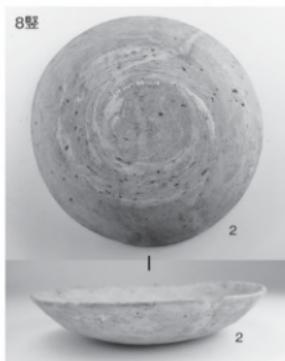
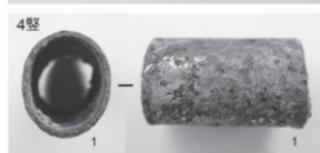
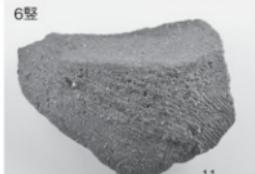
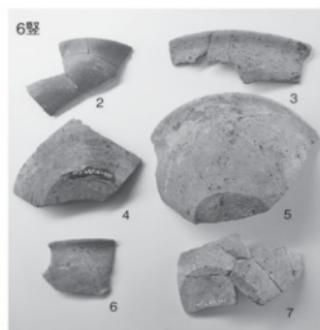
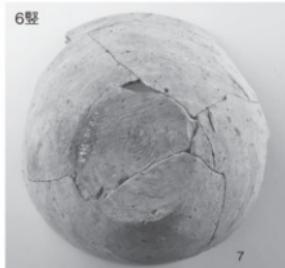
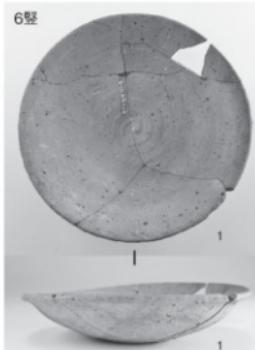


96 江曾原遺跡の現況写真(資料室展示)

図版 14

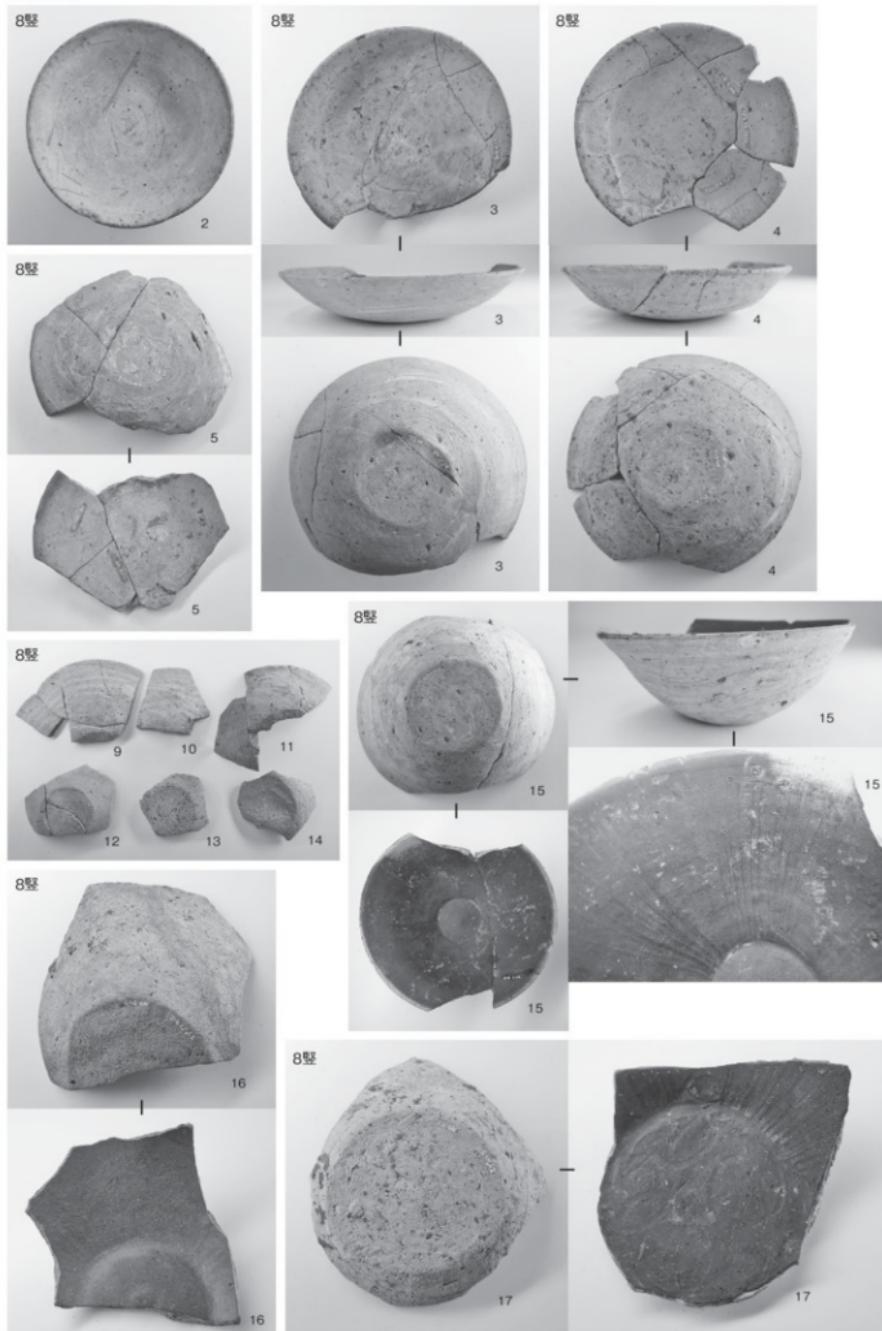


出土遺物（1）

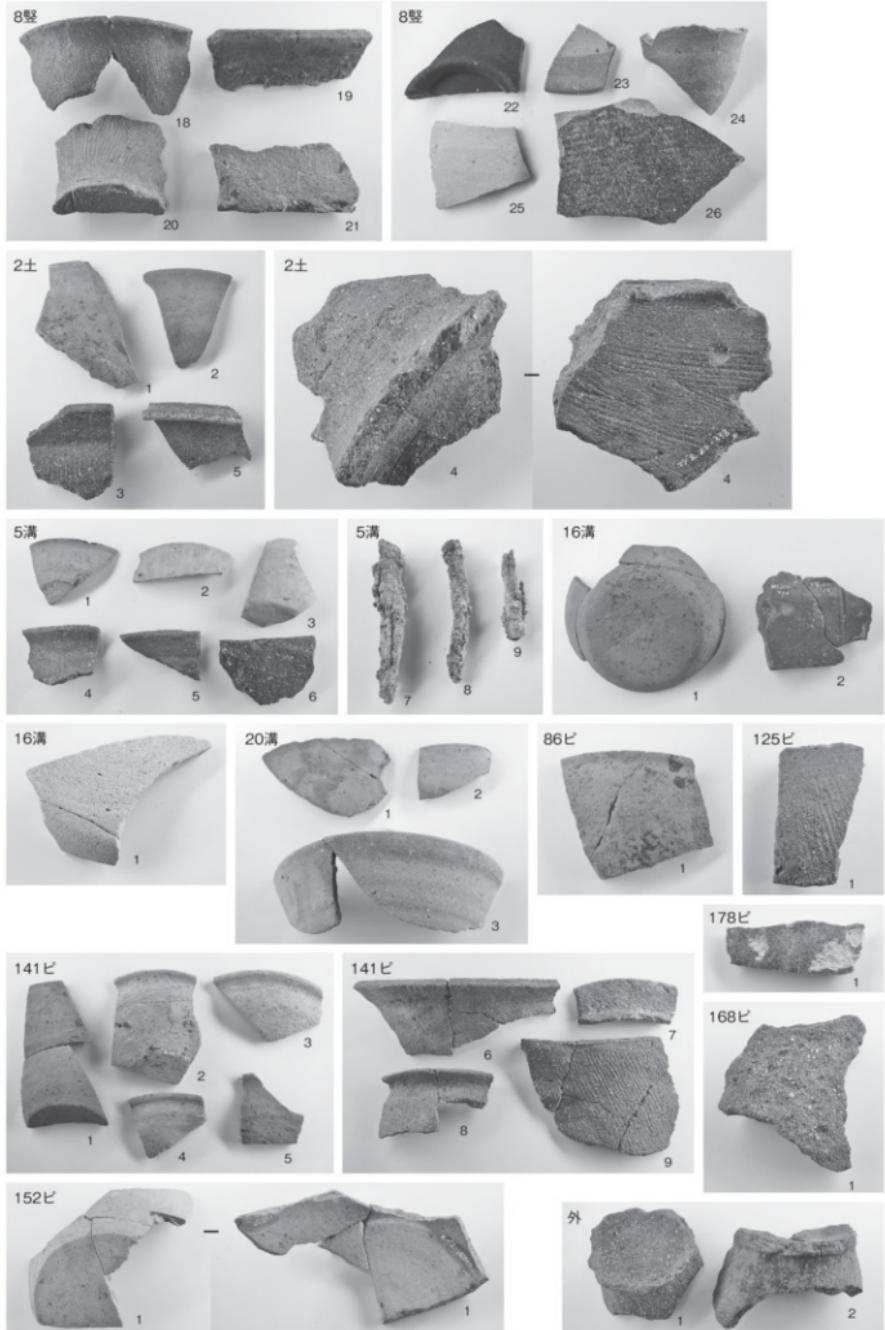


出土遺物 (2)

図版 16



出土遺物 (3)



出土遺物 (4)



1 井戸周辺



2 井戸上層



3 井戸内木製品出土状況



4 溝内粘土管



5 大溝内粘土管断面



6 溝内粘土管



7 大溝内粘土管



8 2号倉庫



9 柱穴内木材出土状況



10 旧3号竪穴内櫛出土状況(置き石屋根か)



11 出土した遺物



12 野帳「江曾原遺跡発掘調査日誌2」



13 野帳の内容



14 江曾原遺跡報告原稿



15 調査初日の遺構確認状況(葦で遺構を表示)



16 女子生徒による発掘調査



17 井戸付近の調査風景



18 女子生徒による発掘調査

報告書抄録

ふりがな	えぞばらいせき						
書名	江曾原遺跡						
副書名	八幡地区農道整備事業に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	山梨市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第25集						
編著者名	樋原功一						
編集機関	公益財團法人 山梨文化財研究所						
所在地	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566-2 Tel 055-263-6441						
発行年月日	西暦 2016年3月25日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号			
えぞばらいせき 江曾原遺跡	やまなしけんやまな しえぞばら 山梨県山梨市江曾原 1324ほか	19205	41	35°40'29"	138°40'27"	2013年3月 19日～ 4月5日、 12月23日～ 2014年1月 30日	925	農村活性化事業に 伴う農道整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
江曾原遺跡	集落遺跡	平安時代	堅穴建物跡・ 掘立柱建物跡・ 溝・井戸・土坑・ ピット	土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器	昭和25・26年の野沢昌康氏調査地区の再調査および周辺地区的調査。

要約	昭和25・26年に故野沢昌康氏により調査された学史的に著名な平安時代集落遺跡。農道工事に伴い周辺を含めて調査したところ、旧調査地点の遺構群を再発掘し、全体的には堅穴建物8軒、掘立柱建物跡3棟などが確認された。旧地点の遺構を改めて図化し、かつての成果を再評価することができた。
----	---

山梨市文化財調査報告書 第25集

江曾原遺跡

— 八幡地区農道整備事業に伴う発掘調査報告書 —

平成28年(2016)3月25日 発行

編集 公益財團法人山梨文化財研究所

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566-2 Tel 055-263-6441

発行 山梨県東農務事務所・山梨市・公益財團法人山梨文化財研究所

印刷 株式会社帝京サービス